第６章　ヒグマ利用について

ヒグマは、北半球に広大な分布域をもつ動物であり、民族誌からは、その多くの地域でクマ儀礼の存在が示されるなど、価値の高い動物として位置づけられていたことが知られる（Hallowell1926、大林 1985 他）。これらの地域では、ヒグマが神の化身や人間の親戚であるとの認識が持たれていることも少なくない。これは、巨大な体躯をもち、時には人間を死に至らすこともあるヒグマに対する畏怖や尊敬、さらには、後ろ足で立つことや母子関係の強さに見る人間との類似性などが背景にあるものとみられている（ロックウェル 2001）。

北東アジアでも、ヒグマに対する信仰や儀礼が普及しているが、本研究の対象地域であるサハリンや北海道では、アイヌやニブフ、ウィルタによって、ヒグマの一時的な飼養を伴う「飼いグマ送り」が行われていたことが明らかとなっている（ピウスツキ 1998〔1909〕、名取・犬飼 1972a〔1939〕、1972b〔1940〕、渡辺 1964、クレイノヴィチ 1993〔1973〕、大林・パプロート 1964 ほか）。「飼いグマ送り」はアムール河下流域からサハリン、北海道にかけて居住する諸民族の間で著しく発達した儀礼であり、その起源や発達した背景などに注目が注がれている（天野 2003a）。

これらの地域では、先史時代からヒグマの出土が認められており、その中には、特異な取り扱いがなされた事例も数多く含まれる。上述した民族誌に見るヒグマの精神的位置づけの高さからすれば、ヒグマ利用の問題が、生業的側面とともに、精神的側面にも深く関わる課題であることは明らかである。本章では、ヒグマの遺存体やそれらを素材とした製品、ヒグマを模した動物意匠遺物を集成し、利用内容の時期的変遷や地域差、飼養の可能性について、実証的に明らかにすることを試みることとする。

第１節　ヒグマについて

ヒグマ（*Ursus arctos*）は分類学上、食肉目（ネコ目）裂脚亜目（ネコ亜目）クマ科クマ属に属する。

ヒグマは、北半球の低地から高山帯までのさまざまな森林と高山草原に生息しており、クマ科の中でもっとも多様な環境に適応した種であるとされる（間野 1996）。本研究の対象地域であるサハリンと北海道ではともに生息が確認されているが、本州以南では現在認められていない。ヒグマの化石は本州や九州、瀬戸内海などでも出土しているため、それらの地域では、かなり早い段階で絶滅したものとみられている（門崎・犬飼 2000）。

ヒグマは、植物食に偏った雑食性で、春から夏には草本類、秋には種子、果実を中心に採餌する（間野 1996）。しかし、時には、食害、排除、戯れ・苛立ちなどの理由から、人や

家畜などを襲うことがあり、その被害は甚大である（門崎・犬飼 2000）。

ヒグマの頭胴長はオスで 2m を超える。性的二形が顕著で、体重で見ると雄は雌の約 2 倍も重く、頭蓋骨や犬歯の性差も大きい（阿部 2000）。形態的特徴は地理的変異が大きく、北海道内では最南部の渡島半島でもっとも小さく、道央部や道北東部にいくにつれて大きくなるとされる（間野 1996）。

ヒグマの活動期間は 4 月中旬から 12 月上旬で、冬の間は土中の穴や樹洞で冬眠し、雌は冬眠穴で 1～3 子を出産する（間野 1996）。母子が行動を共にする期間は、生後 1 年 4 ヶ月～2 年 4 ヶ月であり、性成熟の時期は雄で満 2～5 歳、雌では満 3～4 歳とされる。母子連れと交尾期以外は、基本的に単独で生活する。雌が安定した狭い行動圏を確立するのに対し、雄の行動圏は広く、電波発信機による追跡調査では、雌の行動圏が数 km^2 であるのに対し、雄では数百 km^2 にも及ぶことが明らかとなっている（間野 1996）。同性間、異性間でともに重複する行動圏を有することから、なわばりは存在しないとみられている（間野前掲書）。歩行様式は、掌と蹠の全面を地面につけて歩行する蹠行性である（大泰司 1998）。ヒグマは泳ぎが巧みで、北海道本島が山火事となった際に、直線距離で 20km 程も離れた利尻島まで泳いで渡った記録がある（木村 1995）。

ヒグマの骨格は、基本的に第 1 章で示した部位から成り立っている（図 4）。頭蓋骨は複数の骨で構成されており（図 5）、成長とともに、そのうちのいくつかの骨が癒合する。ヒグマでは、下顎骨の左右は癒合しない。ヒグマの歯は、乳歯から永久歯へと一度生えかわる二生歯性である（後藤・大泰司 1986）。乳犬歯以外の乳歯は生後 4 ヶ月頃までに生え揃い、乳犬歯も生後 5 ヶ月から 7 ヶ月ごろまでには萌出を完了する（門崎・犬飼 2000）。さらに、永久歯は生後 5 ヶ月頃から生え始め、もっとも遅い犬歯は生後 1 歳前後に萌出し始めるという（門崎・犬飼前掲書）。本研究では、乳歯のみが萌出している個体を「幼獣」、永久歯が萌出し始め、歯根形成が完了するまでの個体を「亜成獣」、歯根形成が全て完了した個体を「成獣」として区別することとする。ヒグマは、食肉目の特徴である大きく鋭い犬歯が発達しているが、植物食が中心であるために、臼歯は他の食肉目には類例がない程に長大化している（斜里町立知床博物館内知床博物館協力会 1988）。

前肢骨には、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨の他、指骨である基節骨、中節骨、末節骨などが含まれる。一方、後肢骨には、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨の他、趾骨である基節骨、中節骨、末節骨などが含まれる。食肉目などの雄にみられる陰茎骨は、ヒグマにおいてよく発達している（大泰司 1998）。

第 2 節　出土資料

（1）遺存体

a. 縄文時代における遺存体（表 29、図 54）

縄文時代に属するヒグマの遺存体は、北海道内の40程の遺跡から確認されている。このうち、前期に属する資料がもっとも古く、全道で散発的に出土している。いずれも出土量は少なく、定量的分析結果が示されている遺跡では、網走市大曲洞穴遺跡（金子 1967）で十数点(指(趾)骨など)、千歳市キウス4遺跡A2地区((財)北海道埋蔵文化財センター1999b)で1点（指(趾)骨)、苫小牧市美沢4遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1980）で1点（中手骨)、白老町虎杖浜2遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2001d、2002）で3点（尺骨1点、指(趾)骨2点)、八雲町コタン温泉遺跡（北海道八雲町教育委員会 1992）で7点（歯、大腿、中手/中足骨）が報告されているに過ぎない。このうち、キウス4遺跡A2地区資料は焼土より出土しており、虎杖浜2遺跡から出土した指(趾)骨2点は被熱していたという。

中期に属する資料は少なく、道東部に位置する常呂町トコロ貝塚（東京大学文学部 1963）と積丹半島の付け根付近に位置する泊村堀株1遺跡(北海道文化財研究所 1992)からのみ、出土が認められている。トコロ貝塚では、ヒグマが「割合に多かった」（東京大学文学部 1963：232 頁）といい、小さい骨以外は全て破砕し、まとまった頭蓋骨の出土もなかったとされる。破片骨はかなりの頑強さを保っていたため、成熟した雄の個体が主な捕獲対象であったとみられている。また、肋骨や四肢骨は、縦に裂かれたものが多いことから、道具素材として利用された可能性が指摘されているが、四肢の破砕は骨髄食が行われたことの証左であるのかもしれない。堀株1遺跡では、陰茎骨が1点出土したのみであるが、この資料は被熱していたと報告されている。

後期になると、ヒグマの遺存体を出土する遺跡はその数を増す。さらに、この時期には、石狩低地帯を中心とする地域と道東部において、以下に列挙するような特異な出土状況が認められるようになる。

恵庭市西島松遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2003）

指(趾)骨2点が被熱して出土

千歳市キウス4遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1998a）

中手骨、指(趾)骨の計9点が盛土土壌から出土

千歳市キウス4遺跡Q地区（(財)北海道埋蔵文化財センター2001b）

中手/中足骨、指(趾)骨の計12点が焼土や盛土から被熱した状態で出土

千歳市キウス4遺跡D・F・G地区（(財)北海道埋蔵文化財センター2001c）

中手/中足骨、指(趾)骨の計26点が盛土などから被熱した状態で出土

千歳市美々4遺跡水つき部分（(財)北海道埋蔵文化財センター1981a）

指(趾)骨4点が焼土などから被熱した状態で出土

白老町社台1遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1981b）

中手/中足骨1点が被熱した状態で出土

小樽市忍路土場遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1989）

中手/中足骨、指(趾)骨などの計54点が被熱した状態で出土

標津町伊茶仁チシネ第3竪穴群（北海道標津町教育委員会 1990）

成獣の指(趾)骨 1 点が 1 号竪穴内の炉から被熱した状態で出土

斜里町オクシベツ川遺跡（斜里町教育委員会 1980）

指(趾)骨 2 点が環状列石の中央部の焼土から被熱した状態で出土

これらの中には、焼土や盛土遺構などから出土する例が多く含まれ、被熱骨が高い割合を占める点も特徴である。後期には、内浦湾岸から渡島半島東半部にかけての地域や礼文島でも、ヒグマの遺存体が出土しているが、いずれも被熱などの特異な状況は報告されていない。なお、厚沢部町稲倉石岩陰遺跡（厚沢部町教育委員会 1979）では、骨が破砕されていたことから、骨髄食が行われた可能性が指摘されている。

晩期においても、ヒグマの遺存体を出土する遺跡は割合多くみられ、その中には、以下に列挙するように、石狩低地帯と道東部を中心とする地域で、特異な出土状況を示す遺跡がみられる。

千歳市ママチ遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1983b、1987）

中手/中足骨、指(趾)骨計 18 点が被熱した状態で出土。この中には、土壙の可能性がある Pit から出土した副葬品の可能性のある指(趾)骨 5 点も含まれる。

千歳市美々4 遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1997）

指(趾)骨 1 点が被熱した状態で出土

余市町大川遺跡（北海道余市町教育委員会 2000a）

中手/中足骨、指(趾)骨計 5 点が被熱した状態で出土

余市町沢町遺跡（北海道余市町教育委員会 1989）

中手/中足骨 1 点が墓壙 119 より被熱した状態で出土

富良野市無頭川遺跡（富良野市教育委員会 1996）

Pit から出土した被熱骨中にヒグマの遺存体が含まれる

えりも町油駒遺跡（えりも町教育委員会 2000）

中手骨 1 点、指(趾)骨 7 点など計 19 点が被熱した状態で出土

釧路市幣舞遺跡（北海道釧路市埋蔵文化調査センター1996）

頭蓋骨 1 点が 40 号土坑より出土。脳髄摘出や垂飾用に抜歯された可能性がある。

北見市中ノ島遺跡（北見市 1986）

指(趾)骨 1 点が被熱した状態で出土

斜里町ピラガ丘遺跡秋山地点（斜里町教育委員会 1990）

頬骨(右側)2 点や頭蓋骨破片、陰茎骨らしき骨が 19 号 Pit より被熱した状態で出土

この中には、後期と同様に、被熱骨が高い割合で含まれている。また、この時期には、墓壙に伴う事例が多い点も注目される。

以上、概観してきたように、ヒグマの遺存体は前期から出土が確認されており、後・晩期に出土遺跡数が増す傾向にある。中でも注目されるのは、前期以降にみられる被熱骨の存在であり、石狩低地帯を中心とする地域と道東部で多く確認されている。このような被熱骨は、ヒグマに限って認められるものではなく、北海道に自然生息しないイノシシ類も

表29　ヒグマの遺存体と製品の出土遺跡一覧(1)　縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	遺存体 / 製品* 縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	続縄文 前	続縄文 後	備考	出典
1	浜中2			△					1
2	オショロンナイ2					△		成獣♂	2
3	日の出	+							3
4	トコロ		○					成獣♂多い、破損多い(原材？)	4
5	大曲洞穴	△							5
6	中ノ島				△			被熱	6
						○		被熱	7
7	尾河台地					○		3軒の竪穴床面や石組などより出土、被熱	8
8	谷田					△		被熱	9
9	オクシベツ川			△				被熱、環状列石中央部の焼土より出土	10
10	ピラガ丘 秋山地点				+			ピットより頭蓋破片2、陰茎?の焼骨出土	11
11	オタフク岩洞窟						△		12
12	伊茶仁チシネ第3竪穴群			△				竪穴内の炉より出土、被熱、成獣	13
13	下田ノ沢					+			14
14	東釧路	△							15
15	幣舞				△			頭蓋1点が土坑より出土	16
						△		四肢骨切断	17
16	油駒				△			被熱	18
17	無頭川				△			被熱	19
18	K135　4丁目地点						△	焼土より出土	20
19	西島松			△		(△**)		後期の資料は被熱	21
20	柏木川7				△				22
21	キウス4			△				盛土土壌より出土	23
	A・H・K地区			△					24
	A2地区	△						焼土より出土	25
	Q地区			○				被熱(焼土や盛土から出土する例あり)	26
	D・F・G地区			○				被熱(盛土から出土する例あり)	27
22	ユカンボシC15						△	焼土より出土	28
23	ママチ				△			被熱、土壙(墓?) からの出土例あり	29
24	美々4　呑口			△					30
	水つき部分			△	△			被熱	31
25	美沢4	△							32
26	柏原5				△			被熱	33
27	静川22	△							34
28	社台1			△				被熱	35
29	虎杖浜2	△						被熱している資料あり	36
30	鷲別			+					37
31	ポンナイ	+				(◎)		200個体近い?、成獣主体、頭部破砕	38
32	舟見町						(+)		39
33	上坂台地円筒	△							40
34	高砂			△				成獣のみ	41
35	入江遺跡			(+)					42
36	入江貝塚		(+ / 4)						43
37	小幌洞窟(B)					△			44
38	忍路土場			○				被熱	45
39	大川				△			被熱	46
40	沢町				△			被熱、墓壙より出土	47
41	茶津洞穴					△			48
42	堀株1		△	△				被熱	49
43	瀬棚南川					△		被熱、竪穴床面焼土付近から出土	50
44	稲倉石岩陰			△				骨破砕(骨髄食？)	51
45	寺町			△					52
46	湯川			△					53
47	石倉			△					54
48	戸井			△/ 5				前?後?期層からも骨と製品4点が出土	55
49	コタン温泉	△		△/ 1					56

*　遺存体欄の記号は哺乳類中の割合を示す　主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明:＋、出土なし:－、出土の有無不明:?
　製品欄の数字は出土点数を表す
　( )内は、所属時期の断定が困難な資料である
**　所属年代は続縄文～擦文と報告されている

No. ：縄文時代は図54、続縄文時代は図55の遺跡番号に対応

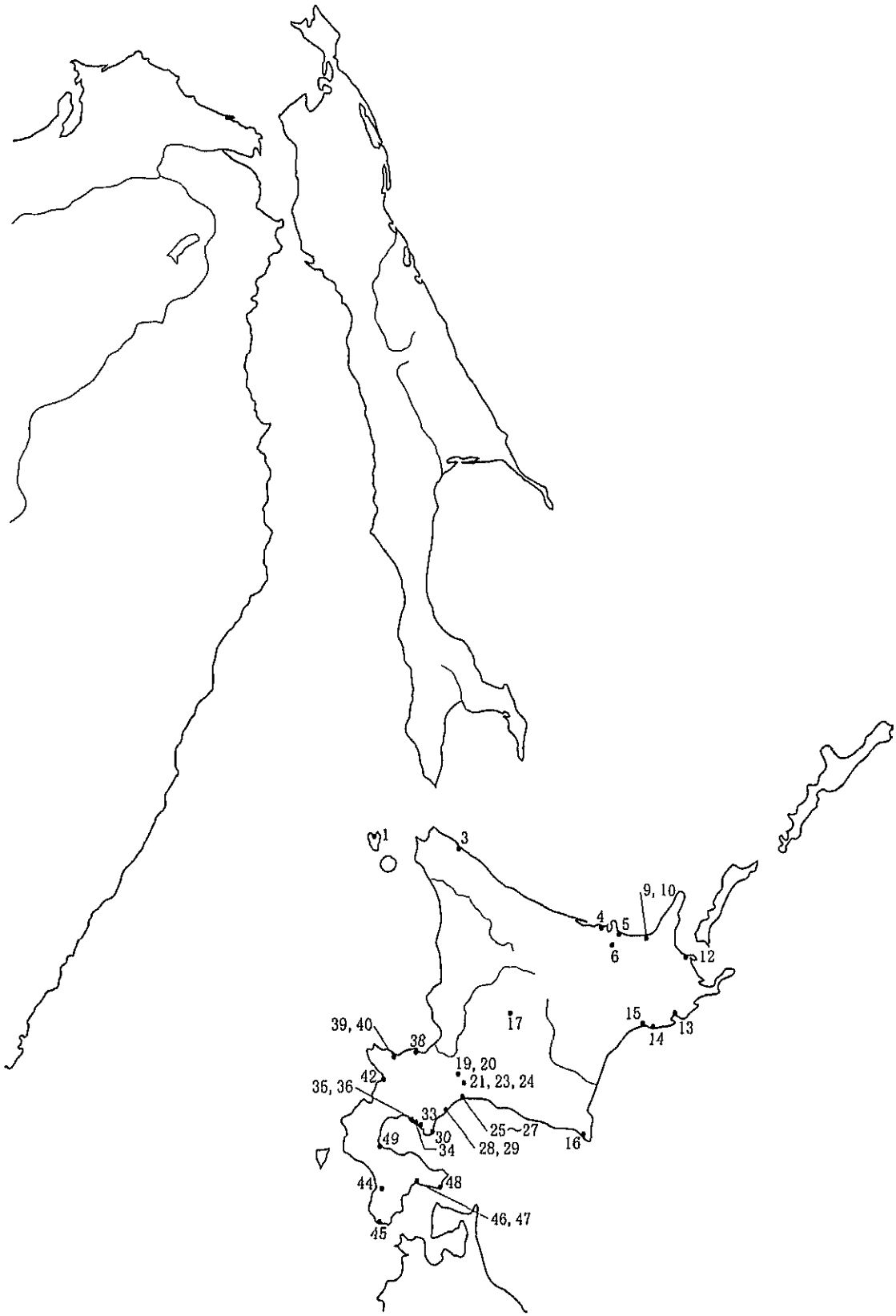

図 54　ヒグマの遺存体とそれを素材とした製品の分布(1)　縄文時代

含め、獣類の多くに及んでいる。縄文時代には、特に後・晩期を中心として、被熱骨を出土する遺跡が認められており、これらが焼土や盛土遺構、墓などに伴って出土する事例が多いことや、同時期に焼人骨の検出例（渡辺 1998）がみられることから、火に関わる葬送儀礼に際し、ヒグマを含めた獣類が焼かれた可能性もある。これらの被熱骨は北海道全域で出土しているわけではないため、儀礼体系や精神観の差異を背景とした地域差が存在したとみなすことができる。また、出土部位は、中手骨や中足骨、指(趾)骨に偏る傾向にあり、苫小牧市柏原 5 遺跡（苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター1997）では、完存した指(趾)骨の存在から、「ヒグマの指先の部分が特別に扱われていることが推測される」（558 頁）と述べられている。ただし、被熱した骨が多いことから、大きな骨は熱のため破砕し、同定が困難だった可能性も留意しなければならない。

なお、サハリンでは、縄文時代に併行する時期に属するヒグマの遺存体は、これまでのところ得られていない。

b. 続縄文時代（アニワ文化期）における遺存体（表 29、図 55）

縄文時代晩期末葉から続縄文時代前半期にかけては、北海道内の 10 程の遺跡で、遺存体の出土が報告されている。出土量の少ない遺跡が大半であるが、室蘭市ポンナイ貝塚（直良 1939）（註 1）のように、200 個体近いヒグマの全身骨が出土したとされる遺跡もある。この資料は、縄文時代晩期もしくは続縄文時代前半期に属する可能性が高い。この遺跡から出土したヒグマの頭蓋骨は破砕しており、成獣が多いと報告されている。北見市中ノ島遺跡（西本・宮 1989）では、縄文時代晩期から続縄文時代に属する被熱した四肢骨や指(趾)骨が出土している。斜里町谷田遺跡（斜里町立博物館協力会 1988）でも、縄文晩期末葉から続縄文時代初頭に属する中手/中足骨や指(趾)骨 3 点が被熱した状態で出土したことが報告されている。釧路市幣舞遺跡（北海道釧路市埋蔵文化調査センター1999）でも、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭に属する上腕骨と大腿骨が得られているが、ともに切断された痕跡を留めているという。

続縄文時代前半期に属する資料は、礼文町オションナイ 2 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）や斜里町尾河台地遺跡（斜里町立博物館協力会 1983）、厚岸町下田ノ沢遺跡（厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会 1972）、豊浦町小幌洞窟遺跡(B)（西本 1984）、泊村茶津洞穴遺跡（北海道泊村教育委員会 1989）、瀬棚町瀬棚南川遺跡（瀬棚町教育委員会 1983）で得られている。このうち、尾河台地遺跡では、前半期に属する 1 号竪穴と 28 号竪穴の床面で被熱した中手/中足骨 2 点、指(趾)骨 1 点がそれぞれ得られており、初頭に属する 42 号竪穴の上層にある石組からも、被熱した中手/中足骨と指(趾)骨が計 16 点出土している。このような被熱骨の出土は、瀬棚南川遺跡でも報告されており、被熱した指(趾)骨 1 点が 6 号竪穴床面の焼土付近から得られ、それ以外の地点から出土した 6 点（中手/中足骨、指(趾)骨）も被熱していたという。

続縄文時代後半期に属する資料は少なく、3 遺跡のみから確認されているに過ぎない。こ

図 55　ヒグマの遺存体とそれを素材とした製品の分布(2)　続縄文時代

のうち、札幌市 K135 遺跡 4 丁目地点（札幌市教育委員会 1987）から出土した指(趾)骨 2 点と千歳市ユカンボシ C15 遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2003b）から出土した尾椎破片は、ともに焼土から出土したと報告されている。

以上、概観してきた内容から明らかなように、続縄文時代におけるヒグマの遺存体の出土量は、縄文時代に比べて減退する傾向を示す。ただし、この中には、ポンナイ貝塚のように出土量が多量な遺跡もあり、利用程度における遺跡間格差の大きいことが分かる。また、続縄文時代には被熱骨の出土も認められていることから、縄文時代以来の火に関わる動物儀礼が引き続き行われていた可能性が考えられる。

なお、サハリンでは、続縄文時代前半期にあたるアニワ文化期に属する遺存体の報告例はこれまでのところ知られていない。

c. オホーツク文化期における遺存体（表 30、図 56）

オホーツク文化期においては、北海道とサハリンを合わせて、30 以上の遺跡からヒグマの遺存体が確認されている。この中には、住居内に設けられた動物儀礼の痕跡である骨塚から出土した資料が多く含まれる。なお、骨塚資料については、住居ごとや住居内の位置ごとに、出土量を分けて記載するのが常であるが、本研究の主たる目的は動物儀礼の解明にあるわけではないため、表 30 には、遺跡ごとにまとめて記載することとした。

鈴谷期に属すると断定できる資料はないが、その可能性のある資料として、稚内市オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）から出土したヒグマ成獣の頭蓋骨 2 点を挙げることができる。この資料は、1959 年に行われた調査によって、A - 4 区の褐色砂層中で発見されたものであり、その直下では、鈴谷期の住居址床面が検出されている。この資料については、褐色砂層の上部から沈線文系土器が出土しているとの記載に基づいて、後期（沈線文期）に属すると捉えられることもある。しかし、報告書（大場・大井編前掲書）や当時の調査を指揮した泉靖一氏の記録（1960）、さらにそれらについて検討を加えた前田潮氏の論考（2003）から、この頭蓋骨が鈴谷期の住居址に伴った可能性は十分に考えられる。この他に、鈴谷期に属する可能性があるのは、利尻町種屯内遺跡（種屯内遺跡調査団 2001）から出土した基節骨 3 点である。この資料は地山層の直上に認められた包含層中より出土したものであり、同層からは鈴谷式土器が 1 片のみであるが出土している。出土遺物が少ないため、時期の断定は困難であった。

前期の十和田期には、礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）において、2 号竪穴内に設けられた骨塚よりヒグマの頭部 4 点がオットセイの頭部 2 点とともに出土している。同遺跡では、この資料を除いて、十和田期に属する資料は少ない。

中期の刻文期、江ノ浦期には、オホーツク文化の分布域の拡大に伴って、ヒグマの遺存体を出土する遺跡数が増す傾向にある。この時期に属する資料の中には、香深井 1 遺跡（大場・大井編前掲書）や根室市弁天島遺跡（西本編 2003）のように、竪穴内の骨塚より出土した資料も含まれている。弁天島遺跡で出土した頭蓋骨 2 点はともに、成獣段階に達しな

い個体であるという。奥尻町青苗砂丘遺跡（北海道立埋蔵文化財センター2002f、2003d）で検出された当該期の竪穴住居様遺構の内部とされる箇所でも、ヒグマの遺存体が得られており、「骨塚」出土資料と報告されている（註2）。また、斜里町ウトロ遺跡神社山地点（石田他 1994）では、ヒグマの後臼歯1点が墓壙から出土したと報告されている。保存状態は良好であり、この資料のみが意図的に墓壙内に副葬されたものとみられている。

後・末期（沈線文期、貼付浮文期、元地期、トビニタイ期、南貝塚期、東多来加期）には、20以上の遺跡で、ヒグマの遺存体の出土が確認されている。サハリンでは、中部に位置するプロムィスロヴォエ2遺跡（Федорчук1995、内山 2002a、b）から、東多来加期に属する遺存体が得られている。この遺跡では動物遺存体が多量に出土しているが、ヒグマの出土量はごく少量でしかない。また、同じく中部に位置するザーパトナヤ1遺跡で行われた試掘調査によっても、東多来加期に属する遺存体が少量確認されている。一方、北海道では、住居内に設けられた骨塚からの出土資料を中心とする遺存体が、多くの遺跡で報告されている。本研究は骨塚の検討を主題としたものではないため、詳細は省くが、骨塚出土資料の中には、数10個体分を超えるほど、ヒグマが多量に出土している事例もある。近年調査された常呂町トコロチャシ跡遺跡の7号外側骨塚（宇田川 2003）では、貼付浮文期に属する100個体分以上ものヒグマの頭蓋骨が認められているという。骨塚については、事例の集成に基づいた論考がこれまでにも数多く提出されており（天野 1975、春成 1995、佐藤 1999、2004、上 2001、内山 2004など）、当文化期の骨塚が、(1)ヒグマを頂点とした動物儀礼の痕跡であることや、(2)骨塚に含まれる動物種の内容や住居内での配置場所に道北部と道東部で地域差が認められること、などが明らかにされている。骨塚資料の中には、貼付浮文期に属する枝幸町目梨泊遺跡（大井他 1986、枝幸町教育委員会 2004）のように、頭蓋骨と下顎骨が焼かれた後に住居内に持ち込まれている事例や、元地期に属する礼文町浜中2遺跡（上 2001）や同香深井5遺跡（北海道礼文町教育委員会 1999）のように、炉址の脇にヒグマの頭部が置かれる事例が確認されており、動物儀礼の形態に、上述した基本構造の枠内における多様性が見出し得ることは明らかといえよう。また、当該期には、利尻町亦稚貝塚（北海道利尻町教育委員会 1978）のように、沈線文土器と貼付浮文土器が出土するブロック中に構築された焼骨遺構から、被熱したヒグマやキタキツネ、クロテン、ワシ・タカ類などの遺存体が出土した事例もある。この中に、ヒグマの頭部はほとんど含まれておらず、この遺構は、一般に頭部の出土が多い住居内骨塚と連繋した動物儀礼の痕跡である可能性が指摘されている。

所属時期不明の資料は特にサハリンに多いが、いずれも種名のみの報告か、少量の出土に限られている。サハリンの豊栄植民地内遺跡（豊栄2遺跡）（新岡 1977〔1932〕、新岡・宇田川 1990）では、竪穴内からヒグマの骨が出土したとされるが、当遺跡において竪穴の覆土がほとんど堆積していないことや、遺物がきわめて少ないこと、ヒグマの頭部が出土した竪穴の規模が5mに満たないことなどから、オホーツク文化期よりも新しい時期のものである可能性も考えられる。

表30　ヒグマの遺存体と製品の出土遺跡一覧(2) オホーツク文化期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品* オホーツク 初	前	中	後	備考	出典
1	プロムィスロヴォエ2				△		1
2	ザーパトナヤ1				+		2
3	三ノ沢		(+)				3
4	ススヤ(鈴谷貝塚)		(+)				4
5	ソロビョーフカ			(+)			5
6	リュトガ3			? / 1			6
7	豊栄植民地内(豊栄2)		(+)**			骨が竪穴で得られたという〔骨塚?〕	7
8	南浜通2丁目		(+)				8
9	イワノフカ		(△)				9
—	(サハリン南半)		(? / 1)				10
10	浜中2			△	△ / 1	末期の炉脇では頭蓋1点が出土〔骨塚〕	11
11	香深井1		△ / 1、4***、△ / 6		△ / 3	4軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土を含む	12
12	香深井5				△ / 1	炉脇で頭部1点が出土〔骨塚〕	13
13	香深井6				△ / 3		14
14	種屯内	(△)		△		基節骨3点(初期？)	15
15	亦稚				△ / 1	焼骨遺構より出土、大半が被熱、幼～成獣まで含む	16
16	利尻富士役場		(△)			大半が被熱	17
17	オンコロマナイ	(+)				初期の貼床面に伴い頭蓋骨2点が出土した可能性がある〔骨塚?〕	18
			(△ / 2)****			成獣多い、四肢破損(骨髄食？)	
18	目梨泊　町教委調査				△	(第1ブロック)	19
					◎	(第2ブロック)被熱	
	北大調査				◎	3軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心、被熱	20
	*****				◎	竪穴内〔骨塚〕からの出土中心、被熱	21
19	川西				◎	5軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	22
20	栄浦第二　東大調査				◎ / 1	4軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	23
	町教委調査				◎	2軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	24
21	常呂川河口				◎ / 1	2軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	25
22	トコロチャシ跡				◎ / 1	2軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	26
					△	頭部なし、オホーツク文化期に属する可能性のある製品1点も出土	27
					◎	4軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	28
23	モヨロ　東大調査				◎ / 1	2軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	29
	市教委調査			(+)			30
24	二ツ岩				◎	2軒の竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	31
25	ウトロ海岸砂丘				+	被熱	32
26	ウトロ　神社山地点			△		後臼歯1点のみが墓から出土(副葬品？)	33
27	トビニタイ				+		34
28	松法川北岸				◎	竪穴内〔骨塚〕からの出土中心	35
29	オタフク岩洞窟				+		36
					◎******	竪穴外	
30	トーサムポロ			? / 1			37
31	オンネモト				○	竪穴内〔骨塚〕からの出土を含む	38
32	弁天島西			△ / 2			39
33	弁天島　東教大調査				○		40
	歴博調査			○		竪穴内〔骨塚〕からの出土、幼/亜成獣	41
					○ / 1	竪穴内〔骨塚〕からの出土を含む	
34	青苗砂丘			△		竪穴内?〔骨塚?〕からの出土を含む	42

* 遺存体欄の記号は哺乳類中の割合を示す　主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明:+、出土なし:ー、出土の有無不明:?
製品欄の数字は出土点数を表す
( )内は、所属時期の断定が困難な資料である

** 当遺跡において竪穴の覆土がほとんど堆積していないことや、遺物がきわめて少ないこと、クマの頭蓋が出土した竪穴の規模の小ささ(5m弱)からして、オホーツク文化期よりも新しい時期のものである可能性も考えられる

*** 前期・中期の土器がほぼ半数ずつ出土している層位から出土した製品の点数

**** 遺存体は、オホーツク文化期前期から後期の土器を含むII層と、縄文晩期、続縄文、オホーツク全期にわたる土器を含む層から得られている
製品2点は、表土下部より得られており、正確な所属時期は不明である

***** オホーツクミュージアムえさしと筑波大学の共同調査

****** 報告書中には擦文時代終末期と記載されているが、トビニタイ文化の末裔の遺したものとする見解(大西1996)もあるため、表に加えた

No. ： 図56の遺跡番号に対応

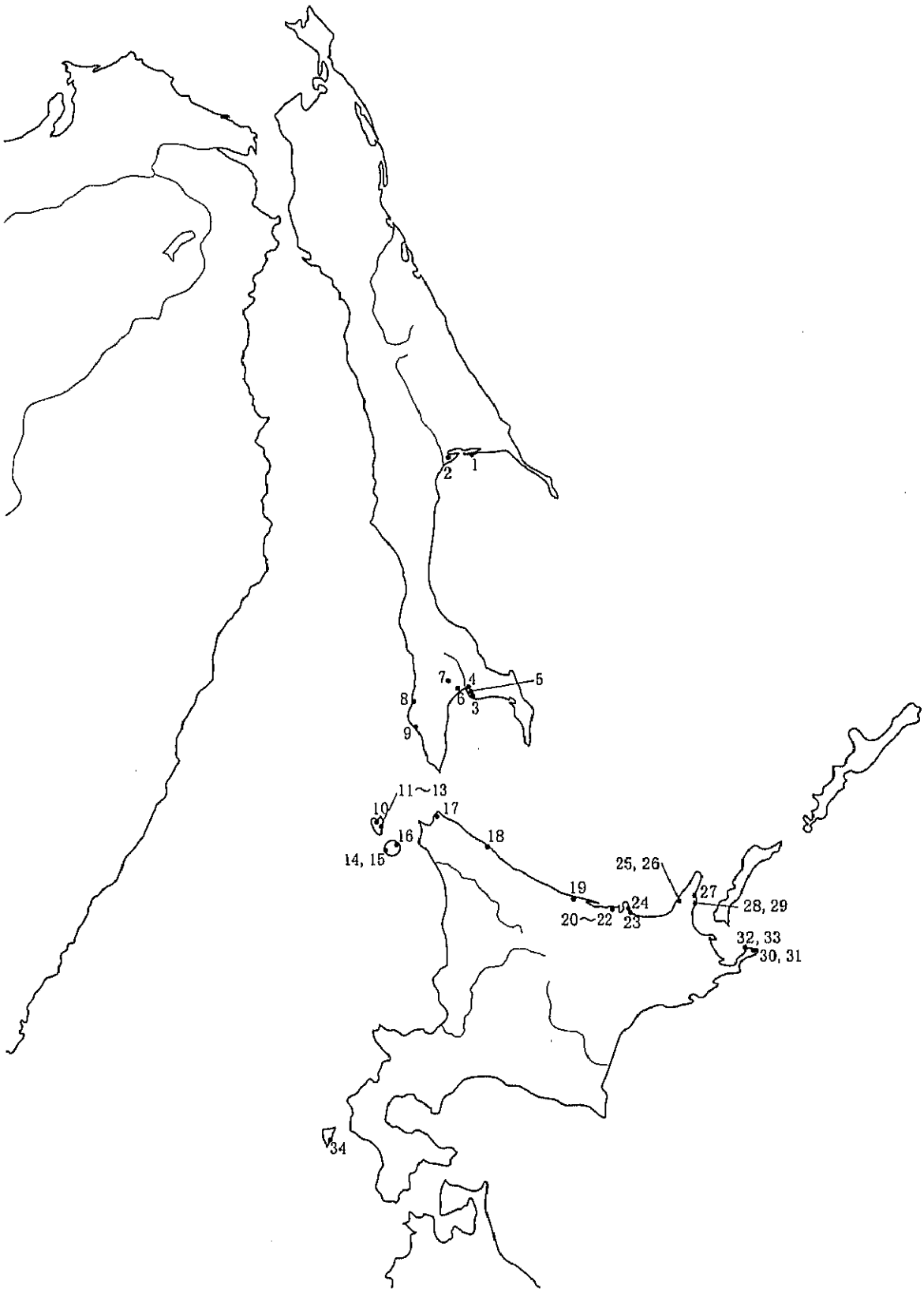

図 56　ヒグマの遺存体とそれを素材とした製品の分布(3)　オホーツク文化期

以上、概観してきたように、オホーツク文化期に属する遺存体は中期の刻文期、江ノ浦期以降に数を増し、その後、住居内の骨塚に含まれる遺存体量は飛躍的な増加傾向を示す。ただし、このような骨塚資料は北海道のみに限られたものであり、サハリンでの確実な出土例を欠いている。有機質遺物であるため、遺存率の問題もあるが、それを考慮してもなお、サハリンではヒグマの利用が北海道に比べて低いと言わざるを得ない。ヒグマの問題は、生業面のみならず、精神文化に深く関わるものであることから、サハリンと北海道との間には、動物観の差異を含めた地域差が生じていたものとみなし得る。また、北海道内でも、天野哲也氏（1975）の指摘するように、道北部と道東部とでは動物儀礼における地域差が明瞭にあり、ヒグマの利用内容や位置づけについて、今後、さらに詳細な復元を試みていく必要があろう。

なお、ヒグマは性的二形の顕著な動物であるため、保存状態の良好な資料に関しては性別が提示される場合が多く、さらに、歯の成長線分析に基づいた死亡年齢や死亡時期の査定も試みられている。このうち、礼文町香深井 1 遺跡では、十和田期から沈線文期にかけての資料 23 例が分析され、当歳獣が 7 例、1 歳？獣が 1 例、2 歳以上が 15 例存在することが明らかとされている（大井他 1980）。当歳獣 7 例のうち、6 例が秋、1 例が夏から秋に死亡したと査定される一方で、2 歳以上の大半が春に死亡したとみられることから、春に親子連れのヒグマが狩られ、親はその場で殺され、仔グマのみが秋まで飼養された可能性が指摘されている。近年、これらのうちの 12 例に対し、古 mtDNA 分析が試みられた結果、成獣と仔との間に親子関係は見出せず、仔グマの 3 例が現生ヒグマの「道南型」に分類され、仔グマ 1 例と 2 歳以上の個体は「道央・道北型」に分類されるという結果が得られた（天野 2002、増田他 2002）。この結果から、併行期に道南部に居住した続縄文文化の担い手が春に捕獲した仔グマを飼養し、それがある段階でオホーツク文化圏内の香深井 1 遺跡へと渡ったとする推測が提起されている（天野 2002、増田他 2002）。

（2）骨製品・歯牙製品

ヒグマの遺存体を素材とした製品は、縄文時代、オホーツク文化期において出土している。本研究では、素材と製品の種類・形態的特徴に基づいて、表 31 のような分類を試みた。以下に、出土資料について時代ごとに述べることとする。なお、分類に基づいた縄文時代からオホーツク文化期にかけての製品の時期的変遷については、表 32 に示した。

a. 縄文時代、続縄文時代（アニワ文化期）における製品

縄文時代において、ヒグマの遺存体を素材とした製品は、噴火湾岸に位置する虻田町入江貝塚（名取・峰山 1958、峰山 1972、北海道虻田町教育委員会 1994）と、渡島半島南部の戸井町戸井貝塚（北海道亀田郡戸井町教育委員会 1993）、渡島半島東部の八雲町コタン温泉遺跡（北海道八雲町教育委員会 1992）のみから出土している（表 33）。入江貝塚資料は前期から後期にかけての包含層中から出土したものであり、戸井貝塚資料の一部は前期と

表31　ヒグマの遺存体を素材とする製品の分類

素材		形態的特徴
Ⅰ　歯牙製	1　切歯	a　有孔品
	2　犬歯	a　有孔品 b　釣針鈎部 c　動物意匠遺物
	3　前臼歯	a　有孔品
	4　後臼歯	a　有孔品
Ⅱ　指(趾)骨	1　基節骨	a　有孔品
	2　中節骨	a　有孔品
	3　末節骨	a　有孔品
Ⅲ　四肢長骨	1　腓骨	a1 尖頭具（「針」） a2 尖頭具（「錐」）
	2　尺骨	a　尖頭具（「刺突具」）
	3　その他四肢骨	a　骨筒
Ⅳ　陰茎骨		a　有孔品

表32　ヒグマの遺存体を素材とした製品の時期的変遷

分類＼時代			縄文			オホーツク					
			前～後	前?後?	後	初	前	前～中	中	後	詳細時期?
Ⅰ	1	a			1						
	2	a	2		4				1		1
		b						1	1	2	
		c								2	
	3	a									
	4	a							1	1	
Ⅱ	1	a		1						2	
	2	a		3							
	3	a	2						1	6	2
Ⅲ	1	a1			1						
		a2						1			
	2	a									1
	3	a								1	
Ⅳ		a					1	2	6		

表33　ヒグマの遺存体を素材とした製品

No.	遺跡名		時代	製品の概要			分類	図番号
				形態的特徴	素材 *	全長 **		
36	入江		縄文前期～後期	有孔品	C	?	I-2-a	—
			縄文前期～後期	有孔品	指趾（末節）	?	II-3-a	—
			縄文前期～後期	有孔品	C	40.2	I-2-a	図57 - 2
			縄文前期～後期	有孔品	指趾（末節）	53.8	II-3-a	11
48	戸井		縄文前期？後期？	有孔品	指趾（基節）	35.5	II-1-a	7
			縄文前期？後期？	有孔品	指趾（中節）	32.3	II-2-a	8
			縄文前期？後期？	有孔品	指趾（中節）	33.6	II-2-a	9
			縄文前期？後期？	有孔品	指趾（中節）	31.5	II-2-a	10
			縄文後期	有孔品	I	20.4	I-1-a	1
			縄文後期	有孔品	C(上・左)？	35.3	I-2-a	3
			縄文後期	有孔品	C(上・右)？	53.0	I-2-a	4
			縄文後期	有孔品（原材？）	C(下・左)	38.3	I-2-a	5
			縄文後期	有孔品（未製品？）	C(下・左)	41.2	I-2-a	6
49	コタン温泉		縄文後期	針	腓骨（左）	203.7	III-1-a1	12
6	リュトガ3		オホーツク中期？	有孔品	C	86	I-2-a	図58 - 7
—	(サハリン南半)		オホーツク？	有孔品	C	79	I-2-a	8
9	浜中2		オホーツク後期	有孔品	指趾（基節）	39	II-1-a	10
10	香深井1	魚骨層 I	オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	36	II-3-a	12
			オホーツク後期	有孔品	指趾（基節）	46	II-1-a	11
		間層 I / II	オホーツク後期	釣針鈎？	C ヒグマ？	64	I-2-b	2
		1号c竪穴埋土	オホーツク中期	有孔品	陰茎骨	(120)	IV-a	図59 - 21
		1号c竪穴床面	オホーツク中期	有孔品	陰茎骨	(107)	IV-a	22
		魚骨層III	オホーツク中期	有孔品	陰茎骨	(104)	IV-a	23
			オホーツク中期	有孔品	陰茎骨	(151)	IV-a	24
			オホーツク中期	有孔品	陰茎骨	129	IV-a	25
		間層III/IV	オホーツク中期	釣針鈎	C ヒグマ？	62	I-2-b	図58 - 3
		魚骨層IV	オホーツク前～中期	錐	腓骨	133	III-1-a2	図59 - 30
			オホーツク前～中期	有孔品	陰茎骨	(130)	IV-a	26
			オホーツク前～中期	有孔品	陰茎骨	(148)	IV-a	27
			オホーツク前～中期	釣針鈎（未製品）	C	88	I-2-b	図58 - 1
		2号竪穴床面	オホーツク前期	有孔品	陰茎骨	148	IV-a	図59 - 28
11	香深井5		オホーツク末期	有孔品	M	27.2	I-4-a	図58 - 9
12	香深井6		オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	27	II-3-a	13
			オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	(30)	II-3-a	14
			オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	39	II-3-a	15
14	亦稚		オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	27.2	II-3-a	16
16	オンコロマナイ		オホーツク？	有孔品	指趾（末節）	43	II-3-a	17
			オホーツク？	有孔品	指趾（末節）	42	II-3-a	18
19	栄浦第二	4号竪穴床面	オホーツク後期	動物意匠(ヒグマ形)	C	43	I-2-c	5
20	常呂河口	15号竪穴骨塚	オホーツク後期	動物意匠(ラッコ形)	C	64	I-2-c	6
21	トコロチャシ跡		オホーツク後期	骨筒	上腕？脛？	?	III-3-a	—
			オホーツク？	刺突具	尺骨	190	III-2-a	図59 - 31
22	モヨロ	小児骨格付近	オホーツク後期	有孔品	指趾（末節）	(35)	II-3-a	図58 - 19
29	トーサムポロ		オホーツク中期？	有孔品	指趾（末節）	52	II-3-a	20
31	弁天島西		オホーツク中期？	有孔品	陰茎骨	118	IV-a	図59 - 29
			オホーツク中期？	有孔品	M	?	I-4-a	—
32	弁天島		オホーツク末期	釣針鈎	C	58.5	I-2-b	図58 - 4

*　アルファベットは歯牙を表す　I：切歯、C：犬歯、M：後臼歯
上：上顎、下：下顎、右：右側、左：左側
その他の部位は図4を参照
**　（　）内は残存長(mm)
No.：縄文時代は図54、オホーツク文化期は図56の遺跡番号に対応

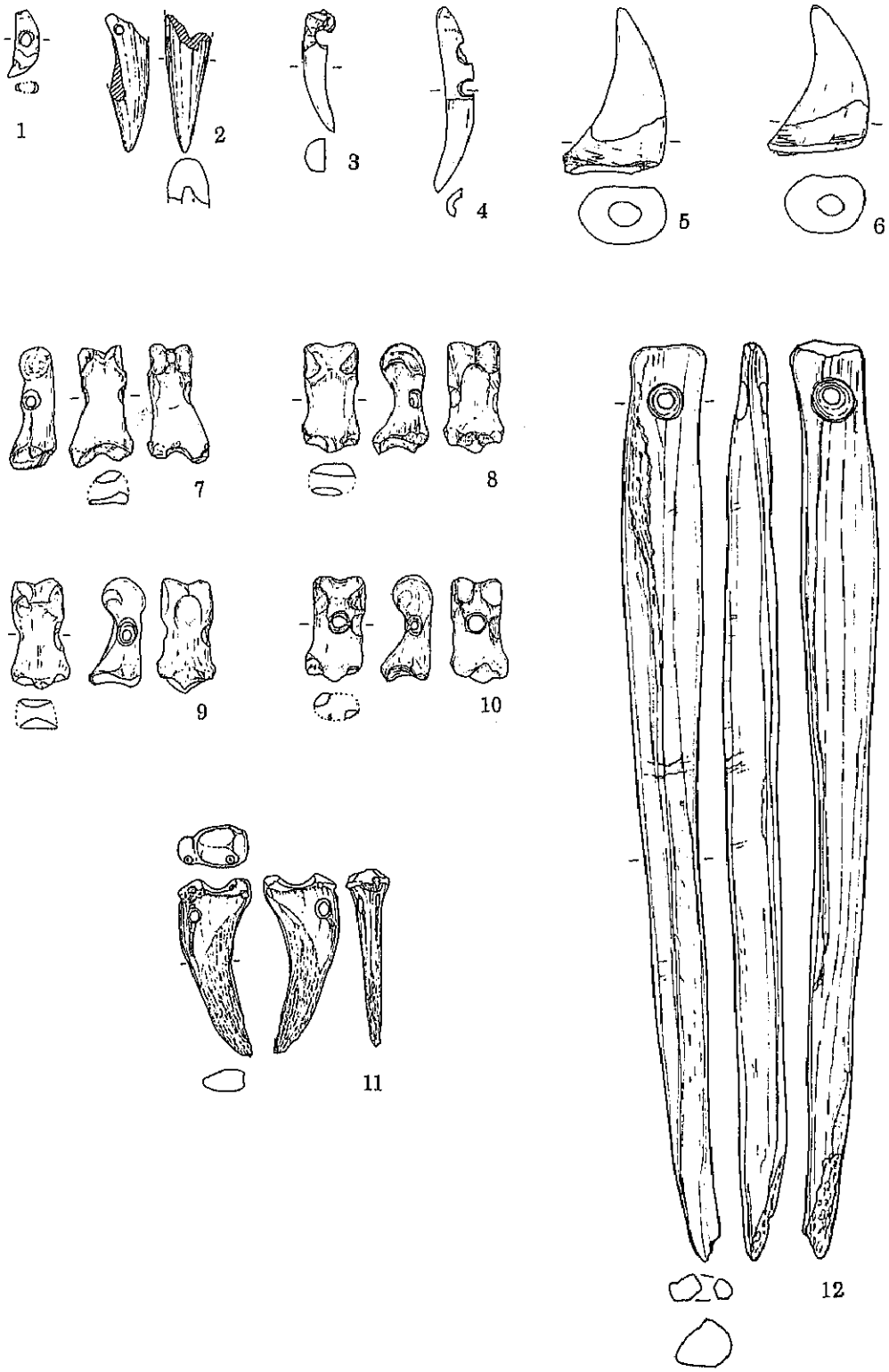

図57　ヒグマの遺存体を素材とした製品(1)　縄文時代

1: 切歯製 2〜6: 犬歯製 7: 基節骨製 8〜10: 中節骨製 11: 末節骨製 12: 腓骨製

1,3〜10: 戸井貝塚　2,11: 入江貝塚　12: コタン温泉遺跡　(縮尺 1/2)

後期の遺物が混在する包含層中から出土しているため、詳細な時期の特定が困難である。戸井貝塚資料の一部とコタン温泉遺跡資料は、後期に属する資料である。

縄文時代に属する資料 14 点のうち、13 点は有孔品であり、歯牙の切歯と犬歯（Ⅰ－1、2－a 類）、指(趾)骨の基節骨、中節骨、末節骨（Ⅱ－1～3－a 類）を素材としている（図 57－1～11）。この他に、コタン温泉遺跡で腓骨を素材とした大形の錐（Ⅲ－1－a1 類）（12）が 1 点出土している。

縄文時代においては、詳細な所属時期の不明な資料が多く含まれ、総点数自体も少ないが、出土地域が渡島半島東半部から噴火湾岸にかけての地域に偏ることと、有孔品を主体とする傾向が見て取れる。

続縄文時代においては、ヒグマの遺存体を素材とした製品の出土が知られていない。

サハリンでは、縄文時代併行期および続縄文時代前半期（アニワ文化期）に属する資料の出土は報告されていない。

b. オホーツク文化期における製品

オホーツク文化期において、ヒグマの遺存体を素材とした製品は、32 点確認されている（表 33）。そのうち、2 点のみがサハリンで出土した資料であり、ともに犬歯を素材とした有孔品（Ⅰ－2－a 類）（図 58－7、8）である。1 点は、サハリン南部のリュトガ 3 遺跡で筆者らが行った表面踏査の際に採集された江ノ浦期に属するとみられる未公表資料であり、もう 1 点は、戦前にサハリン南半部で久保常晴氏が収集された資料である。後者は「おそらく猪の犬歯」（考古学研究室 2002：27 頁）として報告されているが、大きさと形態的特徴からヒグマの犬歯とみられる。

北海道から出土した資料 30 点のうち、鈴谷期に属する資料はこれまでのところ知られていない。十和田期に属する資料は、礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）の 2 号竪穴床面より出土した陰茎骨製の有孔品（Ⅳ－a 類）（図 59－28）1 点のみである。十和田期から刻文期に属する資料は、香深井 1 遺跡から出土した 4 点である。陰茎骨製の有孔品（Ⅳ－a 類）が 2 点（26、27）と腓骨製の錐 1 点（Ⅲ－1－a2 類）（30）、ヒグマの可能性のある犬歯を素材とする釣針鈎部（未成品）1 点（Ⅰ－2－b 類）（図 58－1）が含まれる。刻文期以降には出土量が増す傾向にあり、刻文期には、その可能性がある製品も含めて 9 点が確認されている。有孔品はこのうちの 8 点を占め、その中でも、陰茎骨製の有孔品（Ⅳ－a 類）計 6 点（図 59－21～25、29）が、ヒグマの生息しない島嶼に位置する香深井 1 遺跡と根室市弁天島西貝塚（北地文化研究会 1968、1979）で認められている点は注目される。香深井 1 遺跡で出土した陰茎骨製の有孔品 5 点のうち、1 点は、1 号 c 竪穴床面から出土した資料である。

つづく後期の沈線文期、貼付浮文期には、14 点の製品が確認されている。この時期になると、十和田期以降に香深井 1 遺跡を中心としてみられた陰茎骨製の有孔品（Ⅳ－a 類）が姿を消し、指(趾)骨製の有孔品（Ⅱ－1－a、Ⅱ－3－a 類）（図 58－10～20）が主体を占め

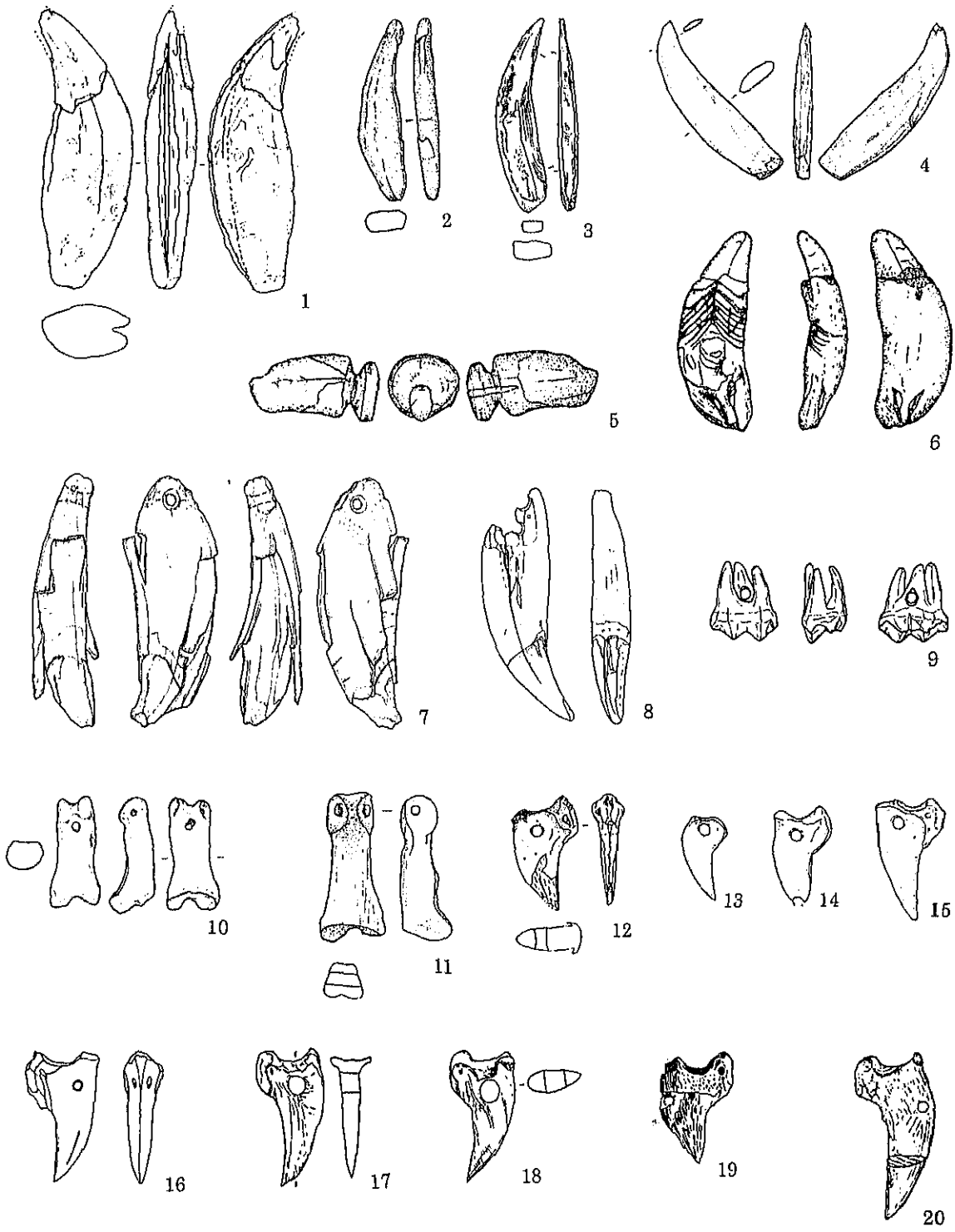

図58　ヒグマの遺存体を素材とした製品(2)　オホーツク文化期
1～8: 犬歯製　9: 後臼歯製　10,11: 基節骨製　12～20: 末節骨製
1～3,11,12: 香深井1　4: 弁天島　5: 栄浦第二　6: 常呂河口　7: リュトガ3（サハリン）
8: 遺跡名不明（サハリン）　9: 香深井5　10: 浜中2　13～15: 香深井6　16: 亦稚
17,18: オンコロマナイ　19: モヨロ　20: トーサムポロ　（縮尺 1/2）

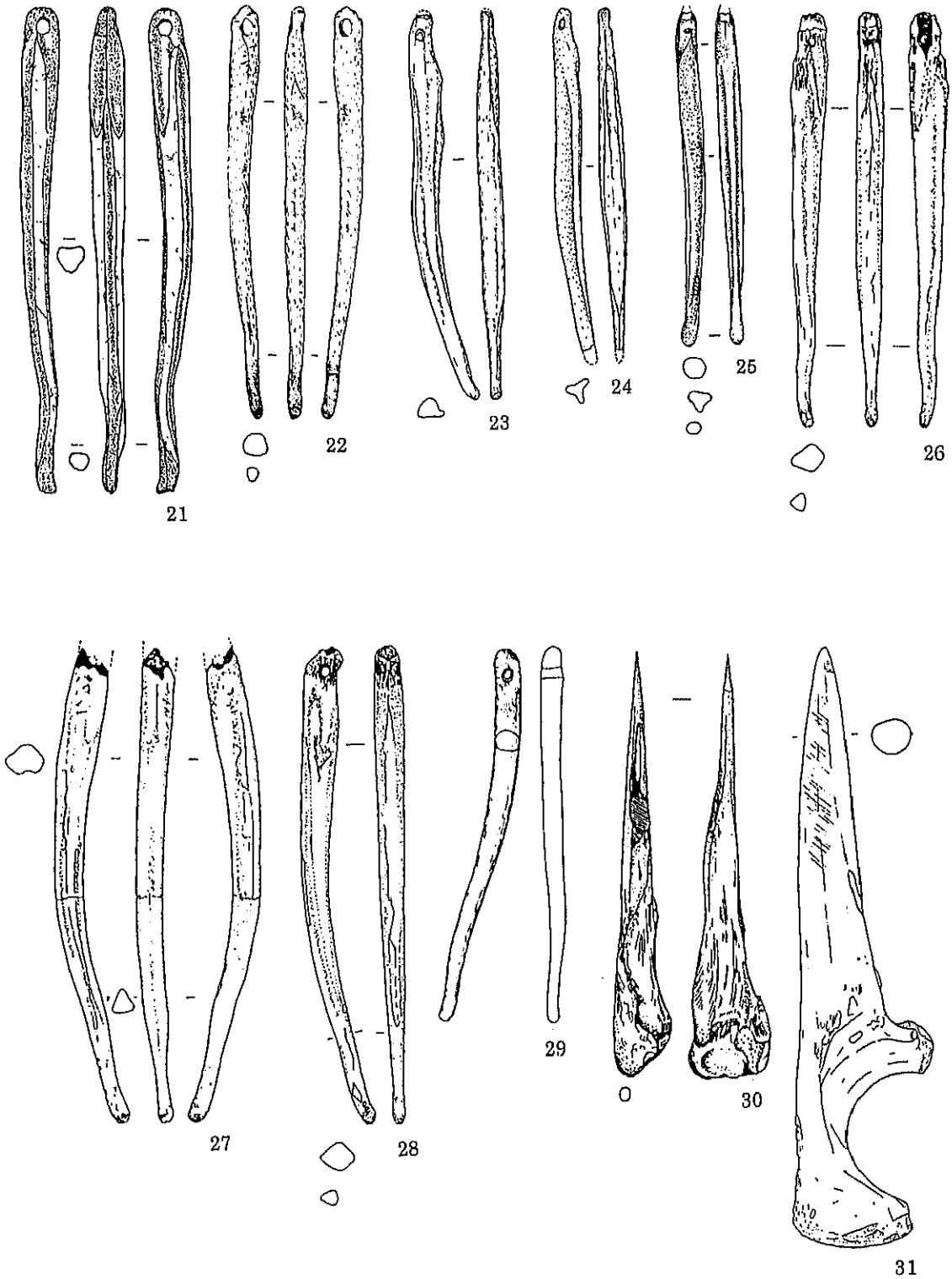

図 59　ヒグマの遺存体を素材とした製品(3)　オホーツク文化期

21～29: 陰茎骨製　30: 腓骨製　31: 尺骨製

21～27,30: 香深井 1　29: 弁天島西　31: トコロチャシ跡　(縮尺 1/2)

るようになる。礼文町香深井6遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）では、沈線文期に属する末節骨製の有孔品（Ⅱ－3－a類）が3点出土しており、そのうち1点は、成獣に達していない年齢段階の骨を素材としている。網走市モヨロ貝塚（大場 1955）でも貼付文期に属する末節骨製の有孔品（Ⅱ－3－a類）が1点得られているが、これは小児の骨格付近から副葬品として発見されたものであり、小児の玩具や飾りであった可能性が指摘されている。当該期には有孔品の他にも、常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部 1972）と同常呂河口遺跡（北海道常呂町教育委員会 1996）で、ヒグマの犬歯を素材とした動物意匠遺物が出土している。前者は、4号竪穴住居址床面から出土したヒグマ頭部を模した可能性のある動物意匠（5）であり、後者は15号竪穴住居址の骨塚から出土したラッコ形の動物意匠（6）である。

以上、通観してきたように、オホーツク文化期に属する資料はそれほど多いものではないが、有孔品を中心に認められている。素材として特に多い部位は、歯牙と指(趾)骨、陰茎骨であり、素材の選択性が見て取れる。また、一部の資料を除いて、素材の形状をほぼそのまま生かした非実用的な製品が多いことから、単なる道具素材としてヒグマの遺存体が利用されたというよりはむしろ、ヒグマ自体に価値を認めた上で製作された製品とみなすことができる。また、これまでのところ、サハリンでの出土数は 2 点と限られているが、これは当地域において、動物遺存体を含めた有機質遺物の分析が北海道に比べて立ち遅れていることが影響している可能性もある。北海道内では、遺跡数の上では、道北部、道東部でほぼ同数ずつ認められているが、出土点数では、道北部に偏る傾向を示す。特に、礼文島、利尻島という離島では、20 点もの製品が出土している。道東部の弁天島も含め、ヒグマが生息していない島嶼やヒグマの生息圏外の遺跡でこの種の製品が多数出土していることは、ヒグマそのもの、もしくは一部（素材段階もしくは製品段階）を捕獲地から島内に持ち込んでいる証拠である。また、現段階では、前節で概観した遺存体の出土が多量である遺跡も含めて、北海道本島での出土が限られる傾向にある。ただし、これらの地域では、調査対象が主に竪穴住居址などの遺構に偏っており、島嶼で良好に遺存し、調査が進められている魚骨層などの調査例の少ないことが、出土量の偏りの背景にある可能性を留意する必要がある。

（3）ヒグマを模った遺物

ヒグマを模った遺物は、縄文時代、続縄文時代、オホーツク文化期の各時期にわたって数多くの出土を見ている。本研究では、これらの意匠遺物について、素材と動物意匠の作出状況、表現部位に基づき、表 34 のように分類を試みた。以下に、出土資料について時代ごとに述べることとする。

a. 縄文時代・続縄文時代（アニワ文化期）におけるヒグマ意匠遺物

縄文時代には、20 点程のヒグマの意匠遺物が全道各地で散発的に出土している（表 35、

表34　動物意匠遺物の分類

素材	動物意匠の作出状況	表現部位
Ⅰ　粘土	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅱ　石	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅲ　骨	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅳ　角	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅴ　歯牙	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅵ　木	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅶ　石炭	1　丸彫り	a　全身 b　体の一部分
	2　器物に付属	a　全身 b　体の一部分
Ⅷ　その他	1　土器施文(スタンプ文)	
	2　線刻	

36、図 60～63)。このうち、もっとも古い製品は、早期に属する標茶町二ツ山第 3 地点で出土したヒグマ頭部の石製品（Ⅱ - 1 - b 類）（宇田川 1989）（図 62 - 33）と、帯広市八千代 A 遺跡（北海道帯広市教育委員会 1990）出土の土製品（Ⅰ - 1 - a?b?類）（図 60 - 2）である。ヒグマを意匠した石製品は、詳細な所属時期不明品も含めて、縄文時代で計 5 点出土しているが、これらはいずれもヒグマの頭部や全身を単体で作出したⅡ - 1 類に属するものである。一方、ヒグマを単体で作出した土製品（Ⅰ - 1 類）は少なく、前述の八千代 A 遺跡出土資料と江別市対雁 2 遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2000 b）出土資料（3）に限られる。

中期以降には、土器に付随した形でヒグマの意匠が多数認められるようになる。粘土を素材とするⅠ類に分類された中期の資料は全て、土器口縁突起に頭部が作出されたもの（Ⅰ - 2 - b 類）（図 61 - 29、図 62 - 30、31）である。後期になると、土器にヒグマの頭部が作出された製品（Ⅰ - 2 - b 類）は、例数を増す（図 60 - 6、9～12、図 61 - 22)。晩期には、上磯町茂辺地遺跡（名取 1972〔1936〕、宇田川 1989）と恵山町日ノ浜遺跡（松下 1968）から、土器口縁突起にヒグマの頭部が作出された製品（Ⅰ - 2 - b 類）が出土している（18、19、23)。この種の製品（Ⅰ - 2 - b 類）は、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭に属す

る札幌市 H37 遺跡（札幌市教育委員会 1996）においても認められている（図 60 - 8）。

続縄文時代初頭から前半期にかけては、60 点近いヒグマ意匠遺物が認められている（表 35、36）。この中では、土器口縁突起にヒグマの頭部が作出された資料（Ⅰ - 2 - b 類）が計 34 点（図 60 - 7、図 61 - 14～17、20、21、24、27）と、多数を占める点が目を引く。上磯町茂別遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1998b）では、この種の製品が 28 点出土している。このうちの大半は、動物意匠部分のみが破砕して出土したものである。17 のように一つの土器に一箇所しか動物意匠が付されない事例もあるが、中には同一土器に複数付けられた資料も含まれているものとみられる。この時期には、前時代には見られなかったヒグマの全身を表現した意匠が土器に付される資料（Ⅰ - 2 - a 類）も認められるようになる（図 60 - 13、図 61 - 26、28）。ヒグマを単体で意匠した土製品（Ⅰ-1 類）は、余市町大川遺跡（北海道余市町教育委員会 2000b）で得られた 1 例（図 60 - 4）のみしか知られていない。ヒグマの全身もしくは頭部を意匠した石製品（Ⅱ - 1 - a、b 類）は、初頭から前半期にかけて、多くはないが出土している（図 62 - 32、35、38～40）。また、この時期には、骨製品（Ⅲ類）（図 63 - 42）や角製品（Ⅳ類）（43～53）、木製品（Ⅵ類）（54）にヒグマの意匠が認められるようになり、素材が多様化する傾向が明らかに見て取れる（表 41）。特に、角製品は、伊達市有珠 10 遺跡（北海道伊達市教育委員会 2003）と恵山町恵山貝塚（佐藤・五十嵐 1996）でまとまって出土したこともあり、11 点と割合多く認められている。両遺跡から出土した資料の中には写実的な資料も含まれており、優品が多い。恵山貝塚資料（佐藤・五十嵐前掲書）は能登川隆氏のコレクション資料であり、出土状況などは不明だが、有珠 10 遺跡のものはいずれも副葬品である（北海道伊達市教育委員会前掲書）。

後半期には、常呂町岐阜第二遺跡（北海道常呂町 1982）で、後北 C_1 式土器の口縁突起にヒグマ頭部の可能性のある 4 つの動物意匠を伴った土器（図 60 - 5）が、他の完形土器 1 点とともに、ピット中から出土している事例が報告されるのみである。

以上、概観してきたように、縄文時代には、土器口縁突起にヒグマ頭部を意匠する事例を主体とし、これにヒグマの頭部もしくは全身を模した石製品や土製品が少量加わる。続縄文時代前半期になると、縄文時代以来の意匠遺物に加えて、素材が多様化するなど、動物意匠が質・量ともに発達する傾向を見出すことができる。後半期には、動物意匠の出土が稀になり、動物意匠の製作が急速に減退することが明らかである。また、両時代を通じて、ヒグマの意匠が単体で作出される事例（1 類）は少なく、何らかの器物に付随する形で意匠される事例（2 類）が主体を占める傾向が明瞭に見て取れる。

なお、縄文時代、続縄文時代において製作された動物意匠遺物の中で、ヒグマを対象とする事例がもっとも多いことは、これまでに提出された数々の論考（宇田川 1989、乾 1995、佐藤 1998、女鹿 2000）からも明らかである。

サハリンにおいて、縄文時代の併行期と続縄文時代前半期（アニワ文化期）に属する動物意匠遺物はこれまでのところ知られていない。

表35　イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(1)　縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	時代	製品の概要		分類	図番号	出典
			意匠動物(部位)	遺物の種類			
1	岐阜第二	続縄文後半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図60-5	1
2	常呂河口	続縄文前半	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	図62-32	2
3	穂香竪穴群	縄文後期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図60-6	3
4	二ツ山第3地点	縄文早期	クマ(頭部)	軽石製品	Ⅱ-1-b	図62-33	4
5	八千代A	縄文早期中葉	クマ(頭部片)	土製品	Ⅰ-1-a?b?	図60-2	5
6	(東旭川)	縄文？	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	図62-34	6
7	滝里安井	続縄文初頭	クマ(全身)	石製品	Ⅱ-1-a	35	7
8	山形	縄文中期？	クマ(全身)	石製品	Ⅱ-1-a	36	8
9	元江別1	続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図60-7	9
10	江別太	続縄文前半	クマ？(頭部)	木製品	Ⅵ-2-b	図63-54	10
		続縄文前半	クマ？(頭部)	角製品	Ⅳ-2-b	43	
11	対雁2	縄文晩期	クマ(全身)	土製品	Ⅰ-1-a	図60-3	11
12	高砂	縄文晩期？	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	図62-37	12
		続縄文初頭	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	38	13
		続縄文初頭	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	39	14
13	旧豊平河畔	続縄文前半	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	40	15
14	H37	縄文晩末葉～続縄文初頭	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図60-8	16
15	キウス4　F・G地区	縄文後期	クマ(頭部)	土器注口	Ⅰ-2-b	9	17
		縄文後期	クマ(頭部)	土器口縁部	Ⅰ-2-b	10	18
		縄文後期	クマ(頭部)	土器口縁部	Ⅰ-2-b	11	19
16	美々4	縄文後期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	12	20
17	静川22	縄文	クマ(頭部)	石製品	Ⅱ-1-b	図62-41	21
18	タプコプ	続縄文前半	クマ(全身)	土器貼り付け	Ⅰ-2-a	図60-13	22
19	有珠10	続縄文前半	クマ？イノシシ？(頭部)	角製品	Ⅳ-1-b	図63-44	23
		続縄文前半	クマ？(全身)	角製品	Ⅳ-1-a	45	
		続縄文前半	クマ(全身)	角製匙先端	Ⅳ-2-a	46	
		続縄文前半	クマ(全身)	角製匙先端	Ⅳ-2-a	47	
		続縄文前半	クマ(全身)	角製匙先端	Ⅳ-2-a	48	
20	大川	続縄文前半	クマ(頭部)	土製品	Ⅰ-1-b	図60-4	24
21	入舟	続縄文前半	クマ(全身)	骨製品	Ⅲ-2-a	図63-42	25
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図61-14	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	15	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	16	
22	茂別	続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	17	26
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	-	

表36 イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(2) 縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	時代	製品の概要		分類	図番号	出典
			意匠動物(部位)	遺物の種類			
23	茂辺地	縄文晩期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図61-18	27
		縄文晩期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	19	
24	下添山	続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	20	28
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	21	
25	石倉貝塚	縄文後期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	22	29
26	日ノ浜　竪穴	縄文晩期	イノシシ(全身)	土製品	Ⅰ-1-a	図60-1	30
		縄文晩期	クマ?(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図61-23	31
27	桜町	続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	24	32
28	恵山	続縄文前半	クマ(全身)	双口土器口縁突起	Ⅰ-2-a	25	33
		続縄文前半	クマ(全身)	土器貼り付け	Ⅰ-2-a	26	
		続縄文前半	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	27	
		続縄文前半?	クマ(上半身)	角製匙先端	Ⅳ-2-b	図63-49	34
		続縄文前半?	クマ(全身)	角製匙先端	Ⅳ-2-a	50	
		続縄文前半?	クマ(頭部)	角製匙先端	Ⅳ-2-b	51	
		続縄文前半?	クマ(全身)	角製匙先端?	Ⅳ-2-a	52	
		続縄文前半?	クマ(頭部)	角製棒状製品	Ⅳ-2-b	53	
29	尾白内	続縄文前半	クマ(全身)	土器貼り付け	Ⅰ-2-a	図61-28	35
30	栄浜1	縄文中期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	29	36
31	野田生2	縄文中期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	図62-30	37
		縄文中期	クマ(頭部)	土器口縁突起	Ⅰ-2-b	31	

No. ：図64の遺跡番号に対応

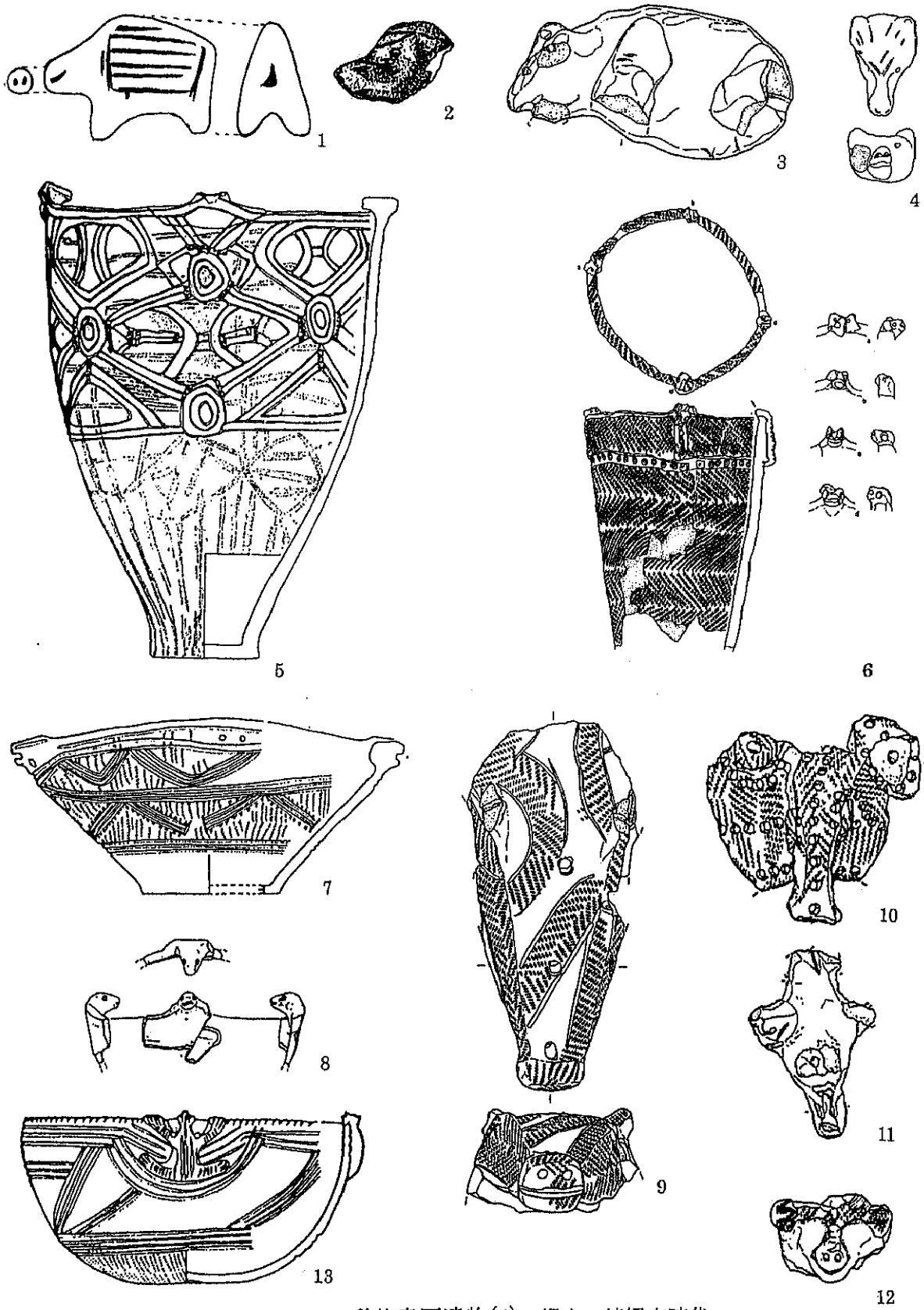

図 60 動物意匠遺物(1) 縄文・続縄文時代

1:イノシシ類 2～13:クマ

1～4:土製 5～13:土器 (5:縮尺 1/4、6:1/8、他 1/2)

図61　動物意匠遺物(2)　縄文・続縄文時代

14～29:クマ

14～29:土器　(縮尺 1/2)

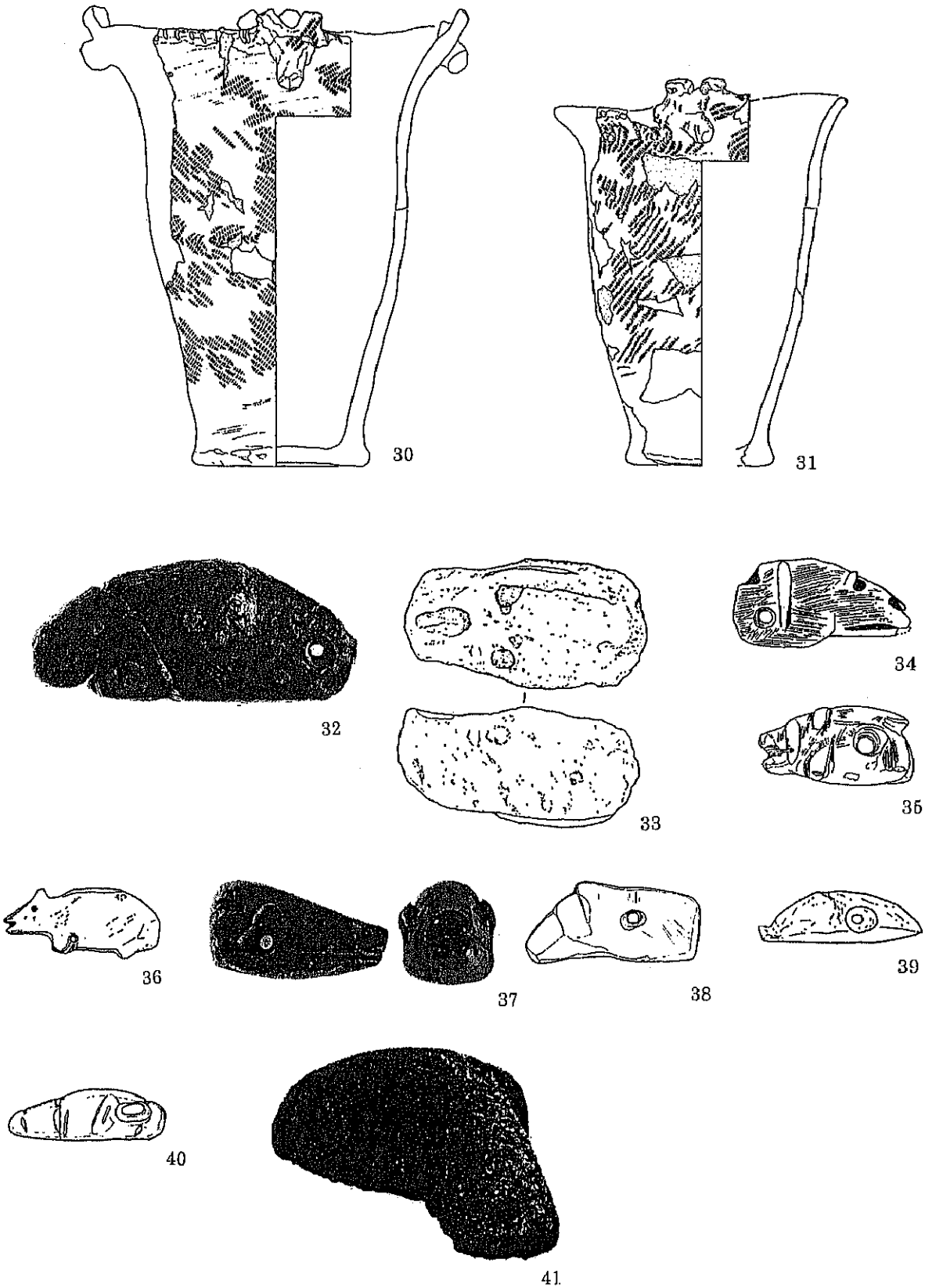

図62　動物意匠遺物(3)　縄文・続縄文時代

30～41:クマ

30,31:土器　32～41:石製　(30,31: 縮尺 1/4、32,41:不明、他 1/2)

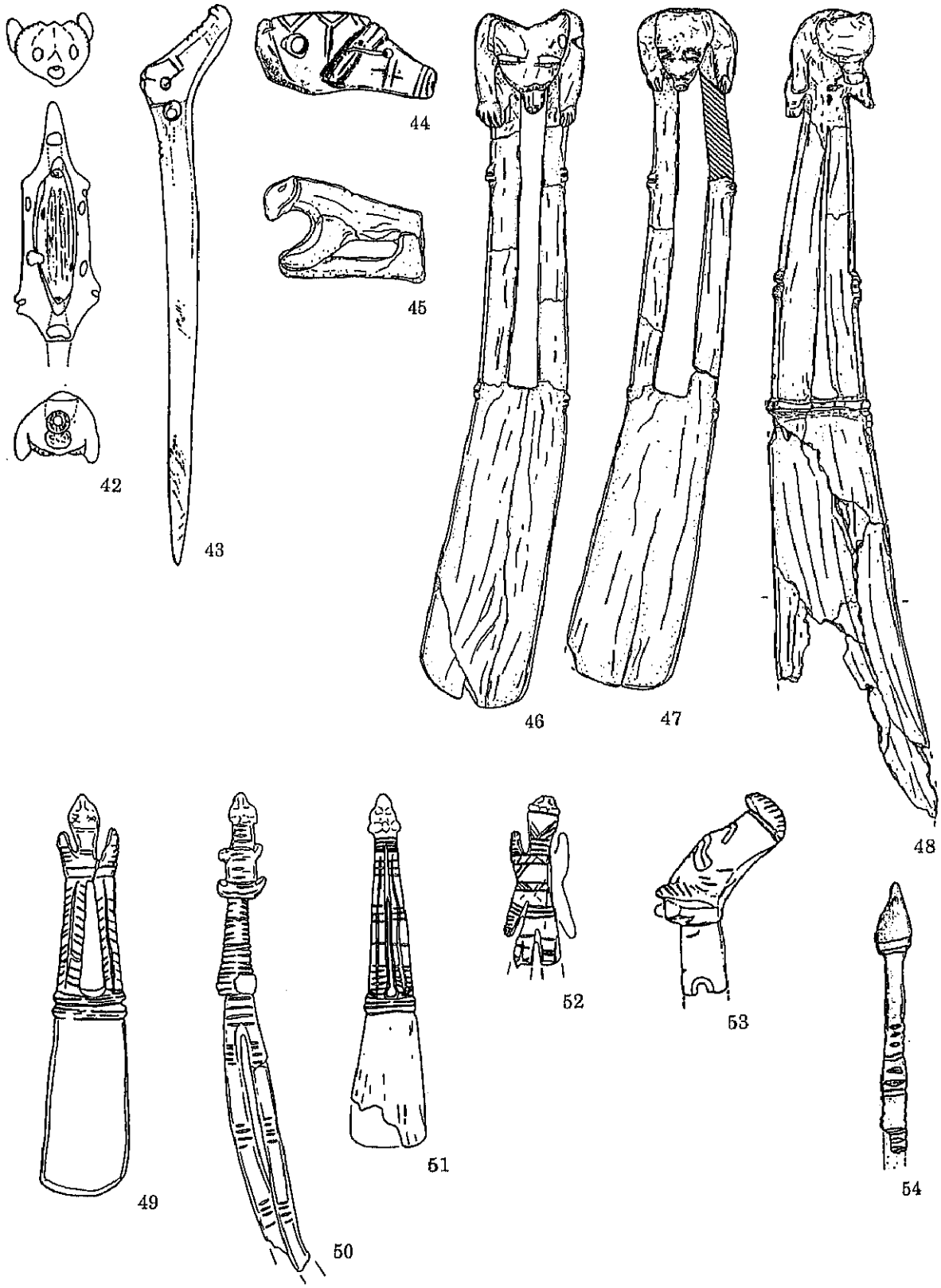

図63　動物意匠遺物(4)　縄文・続縄文時代

42～54:クマ

42:骨製　43～53:角製　54:木製　(縮尺 1/2)

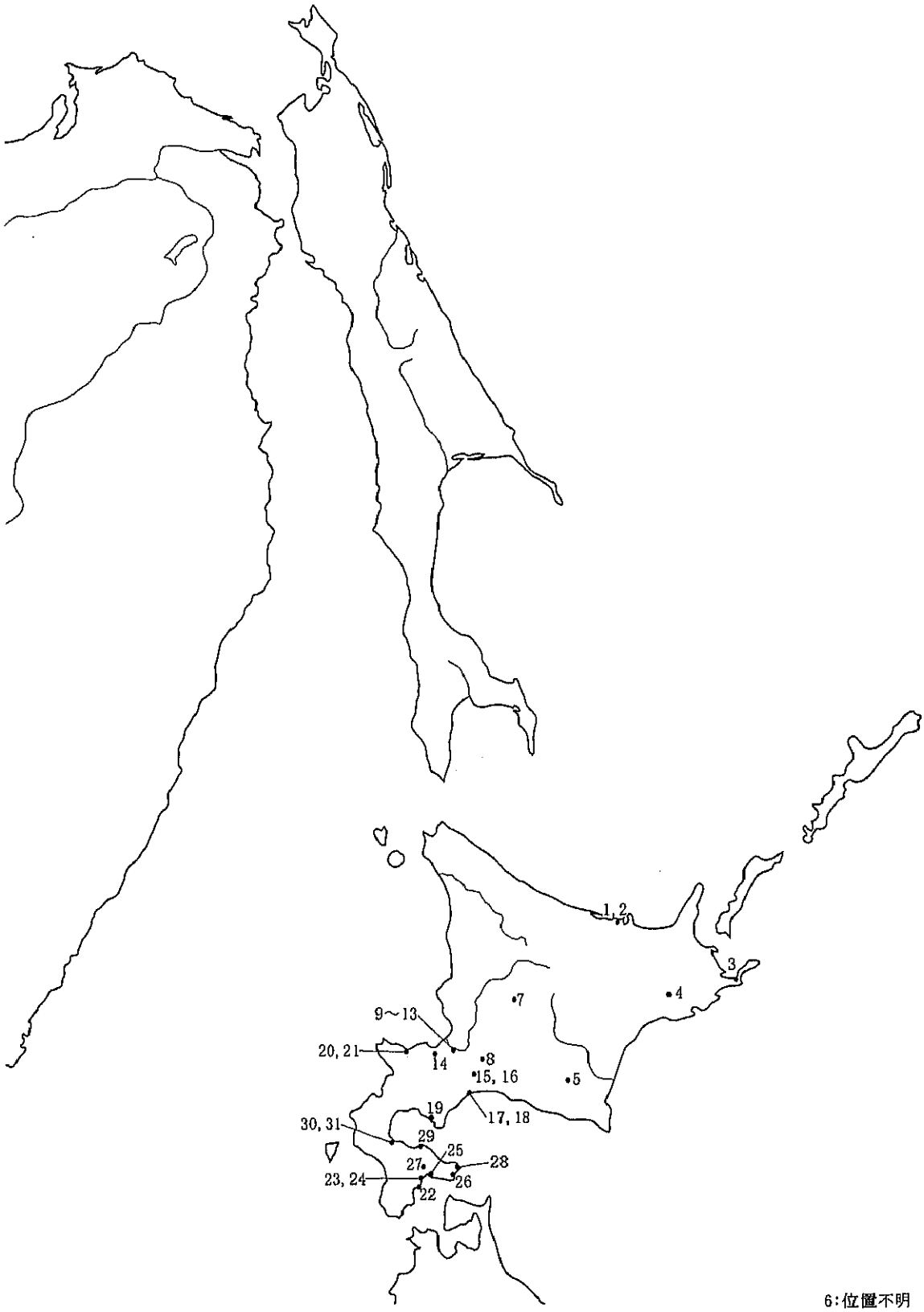

図 64　動物意匠遺物の分布(1)　縄文・続縄文時代

b. オホーツク文化期におけるヒグマ意匠遺物

オホーツク文化期には、ヒグマを模った多くの意匠遺物が認められている（表 37～39）。

鈴谷期と十和田期に属する資料は、サハリンでの出土品に限られており、その数は少ない。鈴谷期に属する資料 5 点のうち、4 点は鈴谷式土器に付されたクマの足跡型スタンプ文（Ⅷ - 1 類）であり（馬場 1940、日本大学文理学史学研究室 1966、Шубин・Шубина1977、竹石・澤田 2002）（図 67 - 58、60、69、70）、もう 1 点は、鈴谷期の可能性のあるクズネツォーヴォ遺跡（ワシレフスキー1992）出土のクマ形土製品（Ⅰ - 1 - b 類）である（図 65 - 7）。十和田期に属する資料は南浜通二丁目遺跡から出土した 1 点のみで、十和田式土器の口縁部の突瘤文列と沈線文列の下部に、クマの足跡型スタンプ文（Ⅷ - 1 類）が押されている（木村 1984〔1939〕）（図 68 - 62）。足先は口縁部に向いており、残存した破片中には、3 つの足跡が横にめぐっているのが確認できる。

続く十和田期～刻文期、刻文期、刻文期～沈線文期に属する資料はいずれも、北海道で出土した意匠遺物である。このうち、刻文期に属するとみられる土製品 2 点（Ⅰ-1-a、b 類）が枝幸町ホロベツ砂丘遺跡（北海道枝幸郡枝幸町教育委員会 1985）から出土した以外は全て、礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）出土資料である。香深井 1 遺跡の出土資料中 37 例（十和田期～刻文期：13 点、刻文期：10 点、刻文期～沈線文期：14 点）は、ネズミザメの吻端骨を素材としたヒグマの全身像（Ⅲ - 1 - a 類）である（図 66 - 20～28）。粗雑品や未製品を多く含む。ホロベツ砂丘遺跡から出土した土製品のうち、全身を表現した資料（Ⅰ-1-a 類）（図 65 - 16）は、大きさや形態的特徴、体部の模様などから、ネズミザメの吻端骨を素材とした意匠遺物を模して作製された可能性が指摘されている（北海道枝幸郡枝幸町教育委員会：前掲書）。香深井 1 遺跡では、刻文期に属する包含層から、クマの足跡型スタンプ文（Ⅷ - 1 類）が押された土器胴部片が 2 点得られている（図 68 - 71、72）。

後・末期（沈線文期、貼付浮文期、元地期、トビニタイ期、南貝塚期、東多来加期）になると、それまでの土製品（Ⅰ類）、土器施文（スタンプ文）（Ⅷ類）、骨製品（Ⅲ類）に加えて、角製品（Ⅳ類）や歯牙製品（Ⅴ類）、木製品（Ⅵ類）、石炭製品（Ⅶ類）にもヒグマの意匠が認められるようになる。その一方で、中期以降、香深井 1 遺跡を中心に多く認められていたネズミザメの吻端骨製の意匠遺物は、急激に数を減じるようである。当該期のサハリンの出土品は 4 点のみであり、いずれもサハリン中部のプロムィスロヴォエ 2 遺跡（東多来加貝塚）から出土した東多来加期の資料である。うち 1 点は、角製匙に作出されたヒグマの可能性のある動物意匠（Ⅳ - 2 - a 類）であり、2 点は埋葬犬に副葬された石炭製のヒグマ頭部の意匠（Ⅶ - 1 - b 類）、1 点は戦前の調査で出土したクマの足跡型スタンプ文の押された土器片（Ⅷ - 1 類）である（図 67 - 59）。後者は土器口縁直下に認められたもので、円形のスタンプ文の横に、足先を口縁部に向ける方向で押圧されている。

北海道では、後期（沈線文期・貼付浮文期）に属するヒグマ意匠が 30 点以上も出土している。出土遺跡は、礼文町浜中 2 遺跡（前田・内山 2002）、同ナイロ遺跡（大川 1998）、

同香深井1遺跡（大場・大井編：前掲書）、同元地遺跡（大井 1972）、利尻町亦稚貝塚（北海道利尻町教育委員会 1978）、枝幸町目梨泊遺跡（北海道枝幸郡枝幸町教育委員会 1988、1998、2004）、同川尻北チャシ遺跡（大場他 1972）、湧別町川西遺跡（北海道立北方民族博物館 1995）、常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部 1972）、同常呂河口遺跡（北海道常呂町教育会 1996）、同トコロチャシ跡遺跡（東京大学文学部 1964、宇田川 2002）、羅臼町二ツ岩遺跡（北海道開拓記念館 1982）、同松法川遺跡（北海道目梨郡羅臼町教育委員会 1984、涌坂 1985）、根室市オンネモト遺跡（東京教育大学文学部 1974）、同弁天島遺跡（西本編 2003）である。ヒグマの意匠は、土製品（Ⅰ類）、骨製品（Ⅲ類）、角製品（Ⅳ類）、歯牙製品（Ⅴ類）、木製品（Ⅵ類）、土器施文（スタンプ文）（Ⅷ－1類）といった多様な素材に見出されている。亦稚貝塚から出土した角製品（図66－38）や、川西遺跡から出土した歯牙製品（図67－50）、栄浦第二遺跡から出土した角製品（図66－40）、トコロチャシ跡遺跡から出土した骨製品（図67－42）に代表されるように、写実性に富む優品が多いのも、この時期の特徴である。中でも、松法川遺跡で出土したヒグマ意匠付き木製品（図67－56、57）は、その造形的な美しさもさることながら、同文化で類例の限られていた木製品の製作技術の高さや製作に係る金属利器の普及をうかがわせるものである。さらに、目梨泊遺跡から出土したヒグマとみられる掌の意匠が糸掛部に作出された骨製釣針軸部（Ⅲ－2－b類）（図66－29）は、土器に押されたクマの足跡型スタンプ文とともに、ヒグマの「掌」に対する特別な思いを表した資料として注目される。ヒグマは後ろ足で立つことがあり、その際には、上肢を器用に用いることが知られている（ロックウェル2001）。また、後ろ足は縦長で、人間と同様に、蹠の全面を地面につけて歩行することから、人間の足によく似ている。現代でも、掌は漢方薬として重用されており、また、北海道やサハリンでは、ヒグマの足跡を見かけることが少なくない。その際に感じるヒグマに対する畏怖によって、オホーツク文化期にはこのような意匠遺物が数多く作り出されることになったのではなかろうか。なお、当該期には、それまで主流であったヒグマの頭部や全身が単体で作出されていた製品（1類）に加えて、器物に付随する形でヒグマが意匠される製品（2類）が多く出現するようになる。

出土層位や伴出遺物が明確でないなどの理由から、詳細な所属時期が不明な製品も30点ほど認められている。そのうちの約半数はサハリン出土の製品で、ウテスナヤ1遺跡（Шоссоннэ1996）からは、ヒグマの頭部を模った軽石製品（Ⅱ－1－b類）（図66－18）が出土している。また、ソロビョーフカ遺跡からは、香深井1遺跡で多く認められたネズミザメ吻端骨製のヒグマの全身像（Ⅲ－1－a類）が得られている。未公表資料である。この資料は、同じく所属時期不明の香深井1遺跡撹乱・廃土出土資料（25）や、稚内市オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）出土資料（26）、網走市モヨロ貝塚（大場 1955）出土資料（27）と並び、写実性の高い製品である。この種の製品は、サハリンではこれまでのところ1例しか出土が認められていない。この他に、サハリンでは、クマの足跡型スタンプ文が押された土器（Ⅷ－1類）が11点認められている（図67－61、図68－63～70）。

表37 イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(3) オホーツク文化期

No.	遺跡名	時代	製品の概要		分類	図番号	出典
			意匠された動物(部位)	遺物の種類			
1	散江郡散江村大字東童	オホーツク初期?	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図67-58	1
2	プロムィスロヴォエ2	オホーツク後・末期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	59	2
	(東多来加貝塚)	オホーツク後・末期	クマ(頭部)	石炭製品	Ⅶ-1-b	−	3
		オホーツク後・末期	クマ(頭部)	石炭製品	Ⅶ-1-b	−	4
		オホーツク後・末期	クマ(全身)	角製匙(浮彫り)	Ⅳ-2-a	−	5
		オホーツク後・末期	イヌ?オオカミ?(全身)	角製有孔品(浮彫り)	Ⅳ-2-a	図65-1	6
3	ウスチ・トナイチャ	オホーツク	シカ?ジャコウジカ?(全身)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	6	7
4	ウテスナヤ1	オホーツク	クマ(頭部)	軽石製品	Ⅱ-1-b	図66-18	8
5	ススヤ(鈴谷)	オホーツク	トド?イノシシ類?(全身)	鳥骨製針入(線刻)	Ⅷ-2	図65-5	9
6	ソロビョーフカ	オホーツク	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	10
7	江ノ浦	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	−	11
8	リュトガ	オホーツク初期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図67-60	12
9	遺節	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	−	13
10	南浜通二丁目	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	61	14
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	−	15
		オホーツク前期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-62	16
11	吐鯉保	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	63	17
12	十和田	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	−	18
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	64	19
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	65	20
−	(十和田?)	オホーツク	イヌ(全身)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図65-2	21
13	本斗	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-66	22
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	67	23
14	イワノフカ	オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)	木製品	Ⅲ/Ⅳ-1-a	図67-54	24
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)	木製品	Ⅲ/Ⅳ-1-a	55	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)	木製・骨製品がともにあるというが、その比率は不明	Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ?イノシシ類?(全身)		Ⅲ/Ⅳ-1-a	−	
		オホーツク?	クマ(頭部)	木製柄勺の把手(彫刻)	Ⅵ-2-b	−	
15	クズネツォーヴォ	オホーツク初期?	クマ(上半身片)	土製品	Ⅰ-1-b	図65-7	25
16	知志谷	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-68	26
−	(南サハリン) *	オホーツク	イヌ?オオカミ?(全身)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図65-3	27
−	(サハリン)	オホーツク初期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-69	28
−	(サハリン)	オホーツク初期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	70	29
−	(船泊第一付近)	オホーツク	クマ(全身)	歯牙製品	Ⅴ-1-a	図67-47	30
17	浜中2	オホーツク後期	クマ?(全身)	歯牙製婦人像据に付帯	Ⅴ-2-a	48	31
18	ナイロ	オホーツク後期	クマ(頭部)	骨製品	Ⅲ-1-b	図66-19	32
19	香深井1 魚骨層Ⅳ	オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	20	33
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	21	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	
		オホーツク前〜中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	−	

* ウスチ・トンナイチャ、アジョールスク1、プロムィスロボエのいずれかの遺跡から出土

表38 イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(4) オホーツク文化期

No.	遺跡名		時代	製品の概要		分類	図番号	出典
				意匠動物(部位)	遺物の種類			
19	香深井1	間層Ⅲ/Ⅳ	オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	33
		1号c竪穴埋土	オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		魚骨層Ⅲ	オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		1号b竪穴埋土	オホーツク中期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-71	
		魚骨層$Ⅲ_0$	オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		間層Ⅱ/$Ⅲ_0$	オホーツク中期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	72	
		1号a竪穴床面	オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		石積み遺構(混入?)	オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		魚骨層Ⅱ	オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	図66-21	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	22	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	23	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	24	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
			オホーツク中～後期	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		撹乱・廃土	オホーツク	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	図66-25	
			オホーツク	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	-	
		表土層	オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-73	
20	元地		オホーツク末期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	74	34
―	(礼文島)		オホーツク	クマ(全身)	歯牙製品	Ⅴ-1-a	図67-49	35
21	亦稚	焼骨遺構	オホーツク後期	クマ(頭部)	トナカイ角製品	Ⅳ-2-b	図66-38	36
22	オンコロマナイ		オホーツク	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	Ⅲ-1-a	26	37
23	富磯		オホーツク	クマ(頭部片)	土製品	Ⅰ-1-b	図65-8	38
24	目梨泊		オホーツク後期	クマ(頭部)	土製品	Ⅰ-1-b	9	39
			オホーツク後期	クマ(頭部)	土製品	Ⅰ-1-b	10	
			オホーツク後期	クマ(体部片)頭部欠	土製品	Ⅰ-1-a	11	
			オホーツク後期	クマ?(全身)	土製品	Ⅰ-1-a	12	
			オホーツク後期	クマ?(上半身片)	土製品	Ⅰ-1-a?b?	13	40
			オホーツク後期	クマ?(肢片)	土製品	Ⅰ-1-a?b?	14	41
			オホーツク後期	クマ?(掌)	骨製釣針糸掛部	Ⅲ-2-b	図66-29	
25	ホロベツ砂丘		オホーツク中期?	クマ(頭部)	土製品	Ⅰ-1-b	図65-15	42
			オホーツク中期?	クマ(全身)	土製品	Ⅰ-1-a	16	
26	川尻北チャシ		オホーツク後・末期	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	Ⅷ-1	図68-75	43
―	(枝幸)		オホーツク?	イヌ?オオカミ?(全身)	土器(「浮き模様」)	Ⅰ-2-a	図65-4	44
27	川西	2号竪穴	オホーツク後期	クマ(全身)	歯牙製品	Ⅴ-1-a	図67-50	45
		竪穴骨塚	オホーツク後期	クマ(頭部片)	歯牙製品	Ⅴ	51	
		3号竪穴	オホーツク後期	クマ(頭部片)	角製品	Ⅳ	図66-39	46
28	栄浦第二	4号竪穴床面	オホーツク後期	クマ(頭部)	牙製品	Ⅴ-1-b	図67-52	47
		7号竪穴骨塚	オホーツク後期	クマ(頭部)	角製品	Ⅳ-2-b	図66-40	
29	常呂河口	15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(全身)	角製品	Ⅳ-2-a	41	48
		15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(頭部片)	骨製品	Ⅲ	30	
		15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(頭部片)	骨製品	Ⅲ	31	
		15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(頭部片)	骨製品	Ⅲ	32	
		15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(頭部片)	骨製品	Ⅲ	33	
		15号竪穴骨塚前	オホーツク後期	クマ(頭部～上半身片)	骨製品	Ⅲ	34	
30	トコロチャシ跡	1号竪穴床面	オホーツク後期	クマ(全身)	骨製品	Ⅲ-1-a	35	49
		7号竪穴	オホーツク後期	クマ(頭部)	角製品	Ⅳ	42	50
		8号竪穴	オホーツク後期	クマ(全身)	角製品	Ⅳ-1-a	43	
		8号竪穴	オホーツク後期	クマ(全身)	角製品	Ⅳ-2-a	44	

表39　イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(5) オホーツク文化期

No.	遺跡名	時代	製品の概要		分類	図番号	出典
			意匠動物(部位)	遺物の種類			
31	モヨロ	オホーツク	クマ(上半身片)	牙製品	V-1-b	図67-53	51
		オホーツク	クマ(全身)	ネズミザメ吻端骨製品	III-1-a	図66-27	52
		オホーツク	クマ？(全身)未製品	ネズミザメ吻端骨製品	III-1-a	-	53
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	VII-1	図68-76	54
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	VIII-1	77	55
		オホーツク	クマ(足跡)	土器(スタンプ文)	VIII-1	78	56
		オホーツク	クマ(全身)	バックル(浮き彫り)	III-2-a	図66-36	57
32	ウトロチャシコツ岬下	オホーツク	クマ(頭部)	土製品	I-1-b	図65-17	58
33	二ツ岩　3号竪穴焼土	オホーツク後期	クマ(頭部片)	骨製品	III	図66-37	59
34	松法川　12号竪穴	オホーツク後期	クマ(頭部)	木製容器	VI-2-b	図67-56	60
	13号竪穴	オホーツク後期	クマ(頭部)	木製鎖状製品	VI-2-b	57	
		オホーツク後期	クマ	骨角製品(「彫刻」)	？	-	
35	オンネモト	オホーツク後期	クマ(上半身)	角製品	IV-1-b	45	61
36	弁天島	オホーツク後末期	クマ(体部片)頭部欠	ネズミザメ吻端骨製品	III-1-a	図66-28	62
37	トーサムポロR-1地点	オホーツク後末期	クマ(頭部のみ?)	鹿角?トナカイ角？	IV-2-b?	図67-46	63

No. ：図69の遺跡番号に対応

表40　イヌ、イノシシ類、シカ類、ヒグマを模った製品(6) 時期不明

No.	遺跡名	時代	製品の概要		分類	図番号	出典
			意匠動物(部位)	遺物の種類			
-	トコロチャシ跡	不明	クマ(頭部)	石製品	II-1-b	図68-79	64

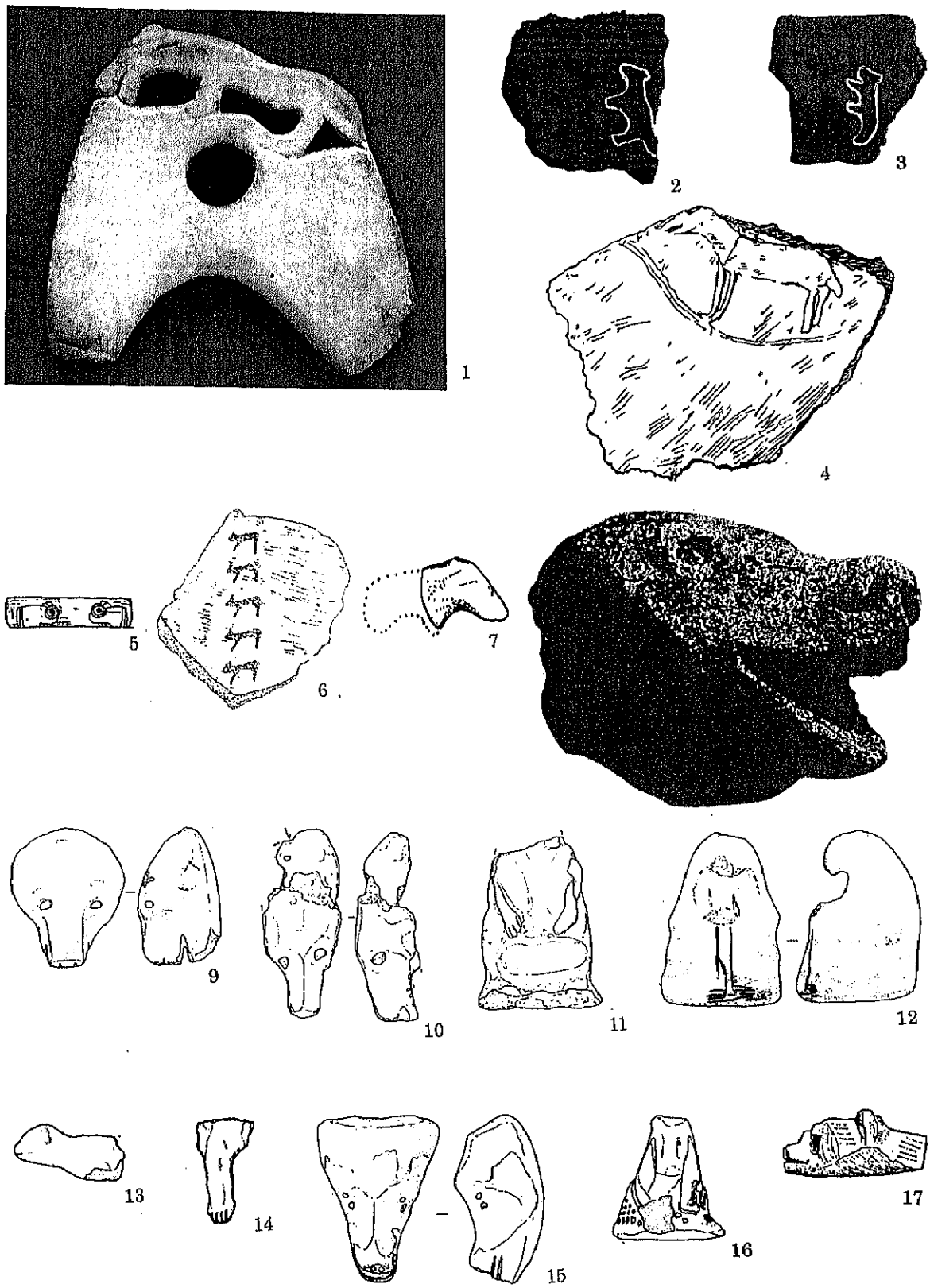

図 65　動物意匠遺物(5)　オホーツク文化期

1,3,4:イヌ?オオカミ?　2:イヌ　5:トド?イノシシ?　6:シカ?ジャコウジカ?　7～17:クマ

1:角製　2,3,6:土器(スタンプ)　4:土器(貼付)　5:骨製　7～17:土製　(2,3 縮尺不明、他 1/2)

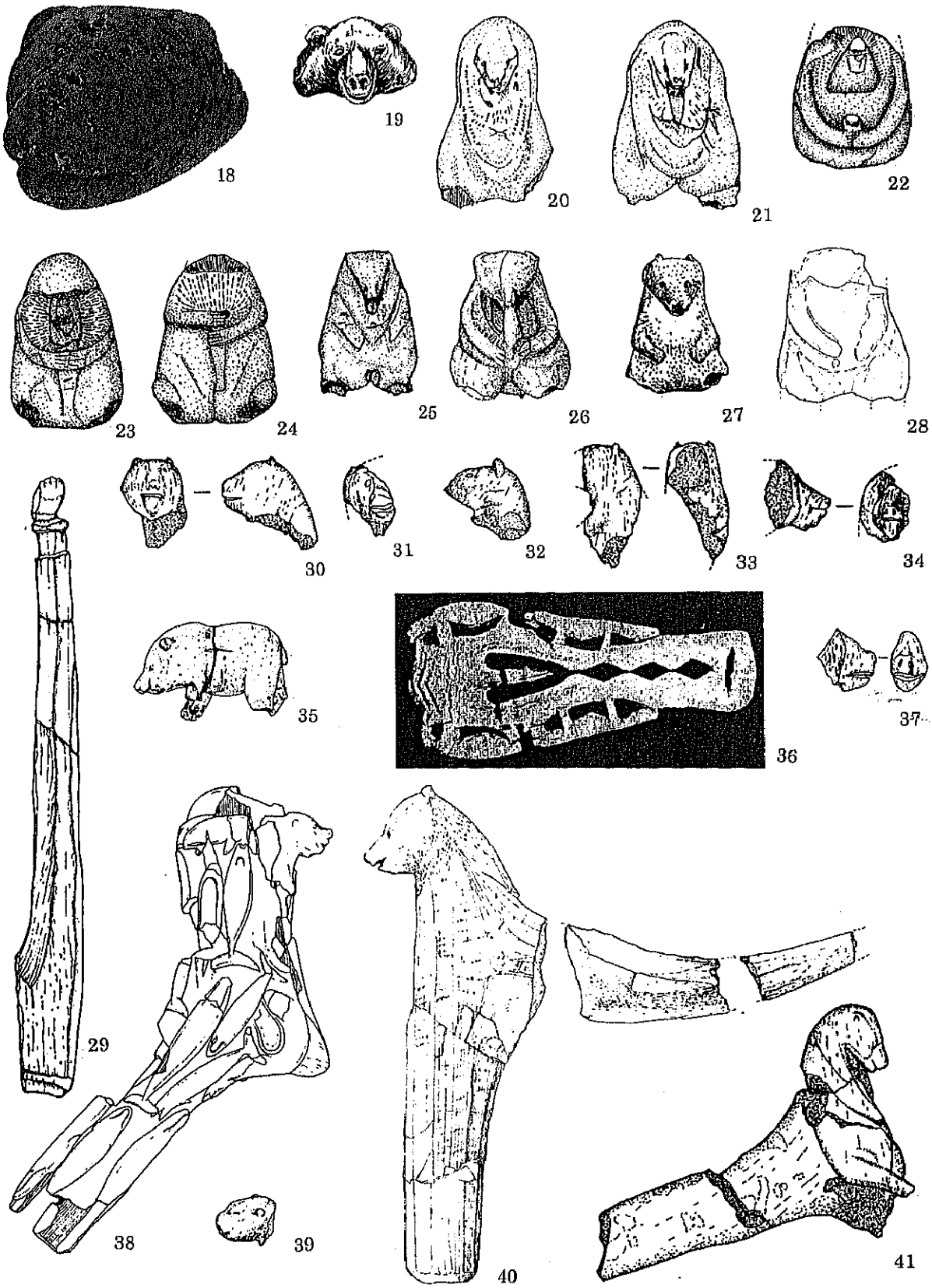

図 66　動物意匠遺物(6)　オホーツク文化期

18～41:クマ

18:石製　19～37:骨製　38～41:角製　(18 縮尺不明、他 1/2)

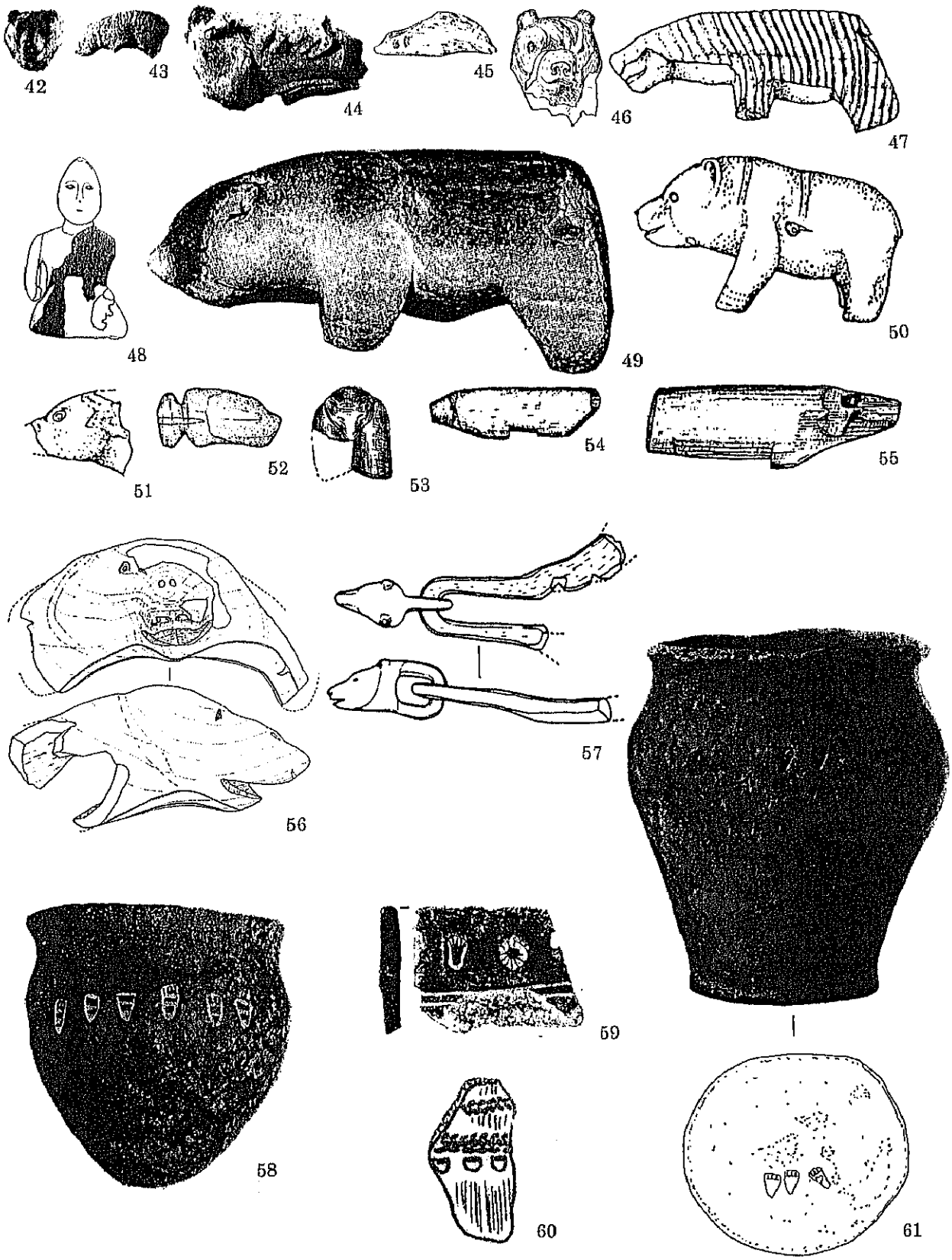

図 67　動物意匠遺物(7)　オホーツク文化期

42～47,49～61:クマ　48:婦人像の裾に付帯するクマ

42～46:角製　47～53:歯牙製　54～57:木製　58～61:土器(スタンプ)　(42～44 縮尺不明、56:1/6、他 1/2)

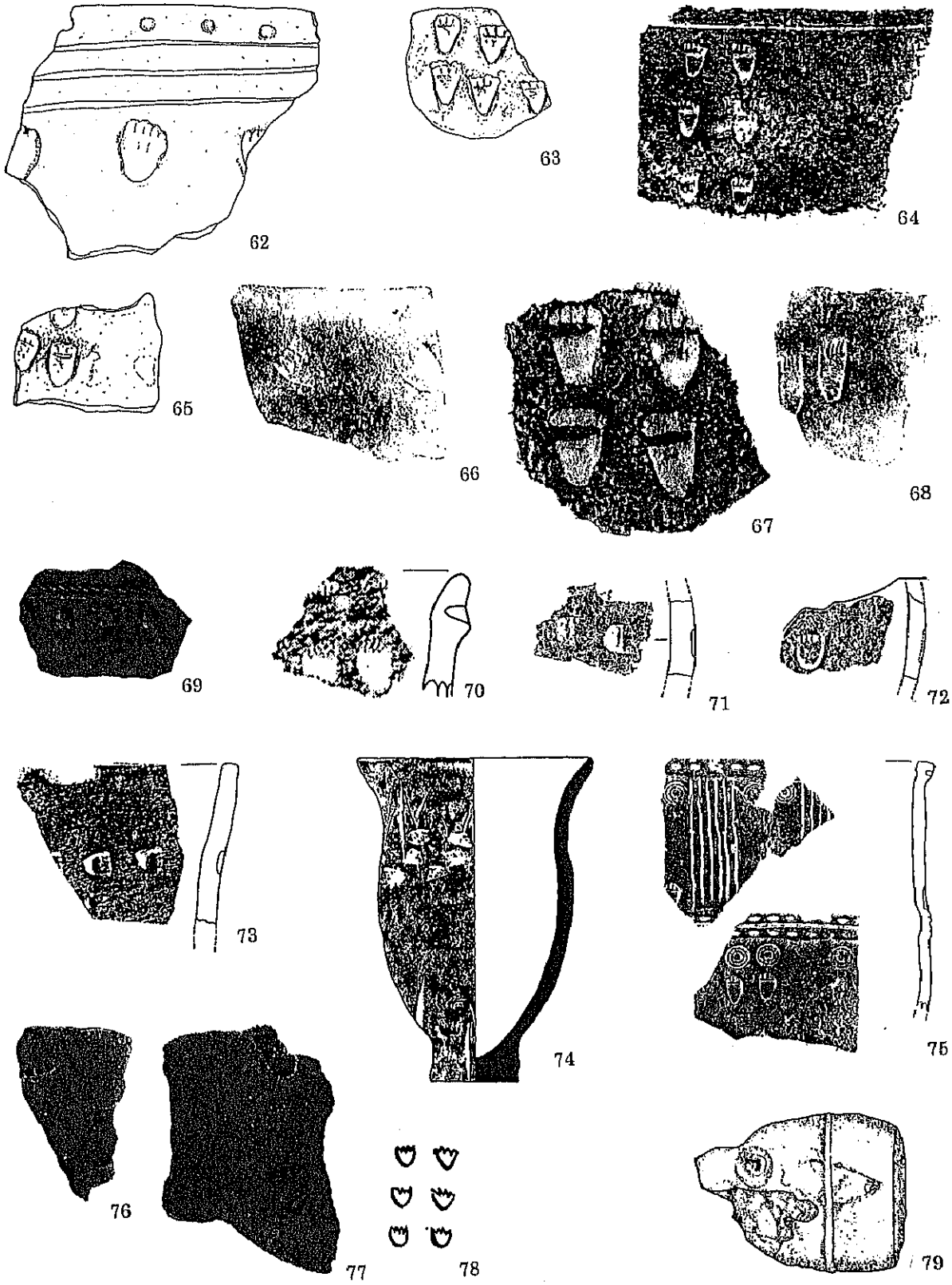

図 68　動物意匠遺物(8)　オホーツク文化期　(79 のみ時期不明)

62～79:クマ

62～78:土器(スタンプ)　79:石製　(66,68:縮尺不明、74,75:1/4、他 1/2)

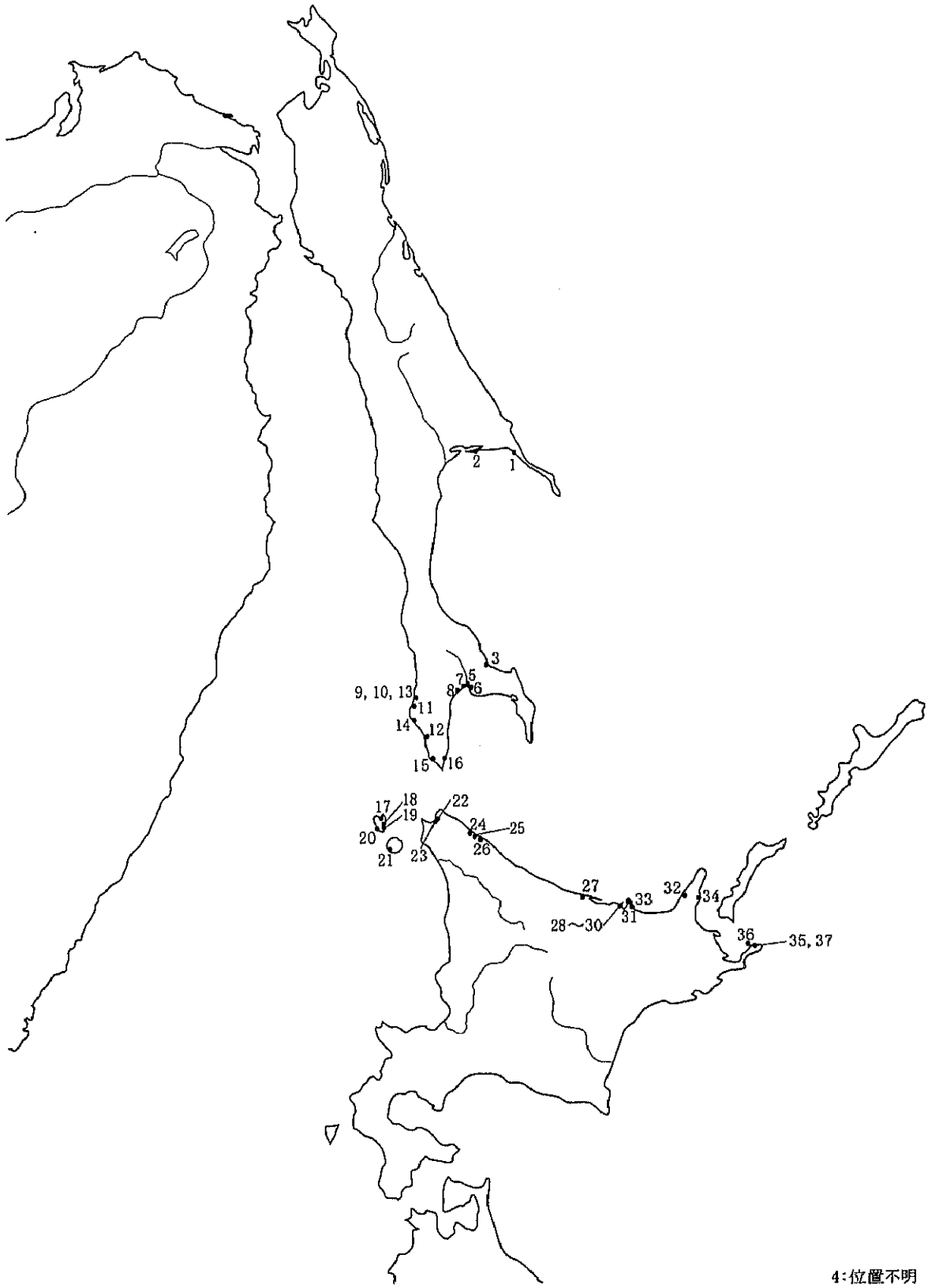

図 69　動物意匠遺物の分布(2)　オホーツク文化期

北海道では、礼文町船泊第一遺跡付近で発見されたとされる歯牙製のクマ全身像（V - 1 - a 類）（児玉・大場 1952、大塚 1968）（図 67 - 47）や、稚内市富磯貝塚（稚内市教育委員会 1964、大塚 1968、松下 1968）から出土した土製品（I - 1? - b 類）（図 65 - 8）、斜里町ウトロチャシコツ岬下遺跡（松下 1968）から出土したヒグマ頭部土製品（I - 1 - b 類）（17）などの優品が多く含まれる。

北海道とサハリンにおける動物意匠遺物の研究はこれまでにも多くなされており（名取 1936、木村 1984〔1939〕、松下 1968、山浦 1984、宇田川 1989、青柳 1993、角 2004 など）、縄文時代、続縄文時代と同様に、オホーツク文化期においても、ヒグマが主たる意匠対象であったことが明らかである。

c. オホーツク文化期に属するヒグマを模った遺物の地域差と時期的変遷

前節までに通観した内容や表 37～39、41 からも明らかなように、オホーツク文化期においては、ヒグマ意匠が単体で作出される事例（1 類）が主体を占め、器物に付随して意匠される事例（2 類）は、同文化期後期に付加されるという時期的変遷が見て取れる。この傾向は、2 類を主体とする縄文時代、続縄文時代とは対称的であり、ヒグマを主たる意匠対象としながらも、その作出方法には大きな差異が認められることが明らかであった。

サハリンでは、土器に押されたクマの足跡型スタンプ文以外に、ヒグマの意匠遺物はあまり多く認められておらず、多様な素材・作出方法でヒグマを模った意匠遺物が多数報告されている北海道との間には、明確な地域差が見出し得る。北海道内においても、道東部ではヒグマ意匠が単体で作出される事例（1 類）と器物に付随して作出される事例（2 類）が半数程ずつ出土しているのに対して、道北部では全時代を通じて 1 類が圧倒的に多く、2 類の事例は、後期の中でも、道東部に分布の中心を置く貼付浮文土器を使用する段階に至り僅かにみられる程度である。また、道東部では竪穴住居などの遺構に伴って出土する事例が多くみられるのに対し（表 37～39）、道北部では包含層出土の資料が中心であることから、後期において道北部（沈線文土器を使用する集団）と道東部（貼付浮文土器を使用する集団）との間に、意匠遺物の価値にも関わる明瞭な地域差の存在していたことが明らかである。さらに、より詳細に見れば、ネズミザメの吻端骨製の意匠遺物を多く出土した礼文町香深井 1 遺跡や、ヒグマを意匠した土製品を多数出土する枝幸町目梨泊遺跡、同ホロベツ砂丘遺跡のように、意匠遺物の素材や作出方法には、遺跡ごと、小地域ごとの差異が大きい点も見逃せない。

d. イワノフカ遺跡出土の動物意匠遺物

第 4 章でも述べたとおり、サハリン南部西岸に位置するイワノフカ遺跡（ゴルブノフ 1995、Горубнов1996、Gorbunov・Amano2002）では、クマもしくはイノシシ類の可能性があるとされる動物意匠が 15 点出土している（図 67 - 54、55）。オホーツク文化期に属するものとされるが、この資料は、その形態的特徴から、民族誌時代の北東アジアに広くみられる

表41　ヒグマを模った遺物の時期的変遷

分類		時代	縄文							続縄文				オホーツク							オホーツク?	時期不明
			詳細時期?	早	前	中	後	晩	晩～続縄	初頭	前半	後半	初	前	前～中	中	中～後	後	詳細時期?		
Ⅰ	1	a						1								-/1		-/2			
		b		1							1		1/-			-/1		-/2	-/2		
		?																-/2			
	2	a									4										
		b				3	6	3	1		36	1									
Ⅱ	1	a				1				1											
		b	2	1				1		2	2								1/-		1
	2	a																			
		b																			
Ⅲ	1	a													-/13	-/10	-/14	-/2	1/5		
		b																-/1			
	2	a									1								-/1		
		b																-/1			
	?	?																-/6			
Ⅳ	1	a									1							-/1			
		b									1							-/1			
		?																			
	2	a									5							1/2			
		b									4							-/2			
		?																-/1			
	?	?																-/2			
Ⅴ	1	a																-/2	-/2		
		b																-/1	-/1		
	2	a																-/1			
		b																			
	?	?																-/1			
Ⅵ	1	a																			
		b																			
	2	a																			
		b									1							-/2		3/-	
Ⅲ/Ⅵ	1	a																		13/-	
Ⅶ	1	a																			
		b																2/-			
	2	a																			
		b																			
Ⅷ	1												4/-	1/-		-/2		1/2	11/4		
	2																				

数値は出土点数であり、縄文・続縄文・時期不明は全て北海道出土品である。オホーツク文化期の項目では、サハリン/北海道の順に出土点数を記載している。

クマの木偶（イノカ）との類似性が高く、出土状況や出土層位などについての詳細な報告も出されていないことから、現段階でオホーツク文化期の資料とみなすには疑問もある。

これらの大半は木製品であり、中には骨製品も含まれているというが、その比率は定かでない。現在では、火災のために資料の大半は焼失してしまっている。筆者の分類におけるⅥ－1－a 類とⅢ－1－a 類に属する資料である。5～7cm のものが多いが、15cm 以上のものもあるという。

報告者のゴルブノフ氏は、同遺跡で多量のイノシシ類の遺存体が得られていることから（Арексеева・Голубнова1993）、これを「ブタ」とみなしている。ただし、動物遺存体と動物意匠遺物が共伴したとの記載は認められず、また、意匠遺物自体がそれ程写実的なものではないため、クマを模した可能性も十分に考えられる。これらの製品がオホーツク文化期に伴うものであるとすれば、意匠の対象となった動物が何であれ、類例のない資料が新たに加わることになる。さらに、これらがヒグマを模したものであるとの仮定に基づけば、民族誌時代に普及する木偶（イノカ）との関連性を強く示唆する資料となり得る。

第３節　利用内容の時期的変遷と地域差

（１）利用内容に見る画期と地域差

前節で通観した各種遺物の出土傾向から、ヒグマの利用については、(1)1 遺跡あたりの遺存体の出土量が総じて少量に限られ、被熱骨の割合の高い縄文時代から続縄文時代にかけての時期と、(2)住居内の骨塚にその骨格の一部が置かれ、1 遺跡あたりの出土量も多いオホーツク文化期、との間に画期を見出すことができる。

前者では、縄文時代後・晩期を中心に、被熱骨が割合多く確認されており、石狩低地帯から道東部にかけて普及した動物儀礼にヒグマが用いられたことを示している。この中には、釧路市幣舞遺跡（北海道釧路市埋蔵文化調査センター1996）や斜里町ピラガ丘遺跡秋山地点（斜里町教育委員会 1990）のように、ヒグマのみが特別に取り扱われた事例も含まれ、ヒグマを模った意匠遺物が他の獣類に比べて圧倒的に多いこと（宇田川 1989）を考え合わせれば、当時のヒグマの位置づけがかなり高かったことがうかがえる。また、被熱骨を中心とする遺存体の多くは、中手骨や中足骨、指(趾)骨に偏る傾向にある。熱による収縮や破砕により他の部位の同定が困難だったことも留意しなければならないが、遺存体を素材とした製品においても、指(趾)骨が素材として選択される傾向は強く、この部位が重視された可能性は十分に考えられる。なお、ヒグマの遺存体を素材とした製品は素材の形状をほぼそのまま生かした非実用品が多いことから、単なる道具素材としてヒグマの遺存体が利用されたのではなく、ヒグマ自体に価値を認めた上で製作されたものとみなすことができよう。

なお、縄文時代、続縄文時代に属するヒグマの出土内容からは、第２章で示したような、

家畜化の傍証となる項目を見出すことができず、礼文島のように、ヒグマが自然生息していない地域の出土資料を含めて、この時期にヒグマが体系的に飼養されていた可能性は低いといえる。そのため、この時期のヒグマの大半は、第 2 章で提示した人間との相互関係（表 3）において、複数世代に対する所有意識がなく、かつ生存状態での拘束も伴わない I - a 段階にあったものとみなすことができよう。

オホーツク文化期に属するヒグマの遺存体は中期（刻文期）以降に数を増し、後期（沈線文期、貼付浮文期）には、1 竪穴内から多量に出土する事例が数多くみられるようになる。特に後者では、常呂町トコロチャシ跡遺跡の 7 号外側骨塚例（宇田川 2003）のように、100 個体を超える出土量が報告されている事例もあり、当時のヒグマに対する利用程度の高さや特異な精神観をうかがうことができる。このようなヒグマに対する精神的位置づけの高さは、縄文時代や続縄文時代においても確認されたものであるが、その表出方法や程度においては、明瞭な差異を認めることができよう。さらに、ヒグマの遺存体を素材とした製品やヒグマを意匠した遺物も、その価値を明確化させる資料となり得る。このうち、ヒグマの遺存体を素材とした製品の中には、歯牙や指(趾)骨、陰茎骨の形状をほぼそのまま生かした非実用品が多いことから、ヒグマ自体に価値を認めた上で製作された製品とみなすことができる。また、当該期に属するヒグマの意匠遺物は多量で、かつその内容が多様性に富むことは、前節ですでに概観したとおりである。

オホーツク文化期には、ヒグマが自然生息しない礼文島や利尻島、弁天島、奥尻島でも、住居内にヒグマの骨格を集積させる事例が確認されている（註 3）。また、遺存体を素材とした製品 33 点のうち 20 点（約 60.6%）までが、離島である礼文島や利尻島から出土したものであり、ここから出土するヒグマの意匠遺物の割合も高い。このことから、天野哲也氏（1975）の指摘するヒグマを頂点とする動物観やそれに基づいた動物儀礼が、生息圏外においても固持されていたことが明らかである。なお、離島に所在する遺跡から出土する遺存体の量は、それを海路で運ぶ労力の大きさのためか、それほど多量ではない。一方、遺存体を素材とした製品やヒグマの意匠遺物は、離島の遺跡において出土割合が高く、集落周辺に生息しないが故に、より強い需要があったことをうかがうことができる。

以上のようなヒグマ利用の盛行は、既知の資料に基づけば、北海道内のみにあてはまるものであり、サハリンでは、スタロドブスコエ 2 遺跡（Васильевский・Голубев1976）やアジョールスク遺跡（Васильевский・Голубев1976）、クズネツォーヴァ 1 遺跡（ワシレフスキー1992）、ベラカーメンナヤチャシ（右代他 1998、Шубина1999）をはじめとする遺跡でヒグマの住居内集積例を欠くなど（註 4）、ヒグマ関連遺物の出土が北海道に比べて少ない傾向にある。このことは、サハリンと北海道との間に、動物観やそれに基づいた動物儀礼についての明瞭な地域差が生じていた可能性を示唆する。

また、遺存体の出土量に限ってみれば、北海道内でも差異が認められており、枝幸町目梨泊遺跡（大井他 1986、枝幸町教育委員会 2004）や、常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部 1972、北海道常呂町教育委員会 1995）、同常呂川河口遺跡（北海道常呂町教育委員会

1996)、同トコロチャシ跡遺跡（宇田川 2003）のように、その出土量が数十個体から 100 個体を超えるような遺跡では、精神的価値だけでなく、食料資源としても比較的高い価値を持ち得たことは見逃せない（表 42）。なお、これらの遺跡は全て、北海道本島に分布する貼付浮文土器（後期）を使用した遺跡に限られている。天野哲也氏（1990）の指摘するように、ヒグマの毛皮や胆のうが交易品としての役割を担っていたとの仮定に基づけば、遺存体の出土量の多い遺跡では、その経済的価値も高かったとみなすことができる（表 42）。このような毛皮や胆のうは、金属製品を中心とする「大陸系遺物」や「本州系遺物」に対する対価であった可能性が指摘されている（天野 1990）。では、大陸側により近く、ヒグマの生息圏内にあたるサハリンで、その出土量が限られていることについては、どのように解釈し得るのだろうか。このことは、①サハリンの居住民が、周辺文化との文物の交流にあまり積極的ではなかったことを示しているのか、もしくは、②これらが経済的に高い価値を持ち得たのは、主としてオホーツク文化圏外の北海道や本州との交易活動においてであったことを示していよう。このうち、②については、オホーツク文化とその南部に位置する諸文化との交流を示す資料が、土器や金属製品を中心に得られている。これまでのところ、オホーツク文化圏から南部の地域へとヒグマの毛皮や胆のうが渡ったことを示す確実な証拠は認められていない。ただし、『日本書紀』斉明 4 年（658 年）是歳条に、オホーツク文化に比定する見解もある「粛慎」を阿倍比羅夫が討ち、「生羆二」と「羆皮七十枚」を献上したとの記述や、『延喜式』巻 41 に、「羆皮」が馬具の一種である障泥に用いられたとの記述が見られる。そのため、オホーツク文化との何らかの関わりを通じて、ヒグマの毛皮が本州へともたらされた可能性も留意されている（関口 2003〔1987〕、箕島 2001）。これに基づけば、その交易活動の一端を担ったのは、オホーツク文化の担い手の中でも北海道本島に居住し、貼付浮文土器を使用した集団ということになり、さらに、ヒグマの毛皮や胆のうは、擦文文化を担った集団の所有した文物や、「本州系遺物」に対する対価であったとの想定が成り立つ。なお、「本州系遺物」は、擦文集団を介在してもたらされた可能性も考えられる。

表42　出土内容からみるヒグマの価値

	北海道		サハリン
	北海道本島の一部	離島	
遺存体の出土量	多い	少ない	きわめて少ない
骨塚中のヒグマ	あり	あり	なし
遺存体を素材とする製品	あり	あり	きわめて少ない
ヒグマ意匠遺物	多い	多い	少ない
精神的価値	高い		北海道に比べて低い？
食料資源としての価値	高め	低い	
交易品としての価値	高い	低い	

（2）オホーツク文化期におけるヒグマ飼養の有無

オホーツク文化期に属するヒグマについては、後世にアムール河下流域からサハリン、北海道にかけて著しく発達をみた「飼いグマ送り」との関連から、ヒグマが飼養されていたかどうかという点に、高い関心が払われている。これについては、性別や死亡年齢、死亡時期の検討からかつてその可能性が指摘され、近年では、古 mtDNA 分析を導入した検討が積極的に進められている（大井他 1980、天野 2002、増田他 2002）。

ヒグマが飼養されたとする見解の根拠となったのは、礼文町香深井 1 遺跡で、成獣の大半が春に死亡していたのに対し、当歳獣の大半が秋に死亡していた点である。つまり、春に親子連れのヒグマが狩られ、親のみがその場で殺され、仔は秋まで飼養されたとの想定がなされたのである。ただし、これについては、近年試みられた古 mtDNA 分析によって、成獣と幼獣との間に親子関係がなく、分析対象となった成獣は全て道央・道北部から、幼獣の大半は道南部から持ち込まれたとの結果が提示されるに至り（天野 2002、増田他 2002）、その論拠は弱まることとなった。また、香深井 1 遺跡から出土した遺存体の内容を詳細に検討すると、表 43（註 5）に示したように、部位別の偏りが大きく、特に体幹部（表中の網掛け部）は、中期の刻文期に属する魚骨層Ⅲ層で幼獣の椎骨 19 個が出土したのみであった（註 6）。椎骨の遺存率は顎骨などに比べて低いことが知られているが（Davis1987）、1 個体あたりの椎骨の個数は、尾椎を除いても 30 個近くもあるため、この数字に基づく推定個体数はかなり限られたものとなる。このような体幹部の少なさは、後期の貼付浮文期に属する枝幸町目梨泊遺跡でも認められた傾向である。それについてかつて筆者は、(1)猟場でヒグマが解体され、必要箇所のみが遺跡に持ち込まれた結果であるのか、もしくは(2)全身が遺跡に運ばれて利用された後に体幹部のみが発掘区外にあたる別地点に配置もしくは遺棄された結果である、との可能性を指摘したことがある（内山 2004）。住居内骨塚でも体幹部の占める割合は一般に低く、部位別の偏りも大きいが、これは、儀礼に用いる部位に選択性が働いていることや、集落内でヒグマを分配したことによるもの（天野 1975）と理解することができる。しかし、儀礼に用いられなかったとみられる包含層出土の資料中にも体幹部が少ないことは、上記の(2)の説明だけでは不十分であり、(1)の可能性を含めて、今後、検討を深めていかなければならない。

ヒグマ猟は、ヒグマの体力が冬眠による消耗から脱せず、さらに、残雪の上に足跡を残し易い春の雪解け頃が最適とされる（アイヌ文化保存対策協議会編 1969）。この時期は草木が冬枯れのままであることから見通しもきき、ヒグマの発見にも自らの身の安全にも好都合であるという。そのため、オホーツク文化期においても、この時期にヒグマ猟が行われ、その対象となったヒグマが親子連れであった場合、仔グマが生け捕りにされるようなこともあり得たかもしれない。しかし、現段階では、飼養の存在を支持する証拠に乏しく、少なくとも、ヒグマ飼養が体系的になされていたとは言い難い状況にある。今後、この問題に取り組むにあたっては、増田隆一氏ら（2002）が指摘するように、従来の分析方法に加えて、炭素・窒素の安定同位体分析を導入し、ヒグマの食性から、飼養の有無を検討して

表43　香深井1遺跡におけるヒグマの部位別出土量（大場・大井編1976、1981を基に作成）

	表土	黒褐色砂質	魚骨層Ⅰ	間層Ⅰ/Ⅱ	魚骨層Ⅱ	1a竪穴	魚骨層$Ⅲ_0$	1b竪穴	魚骨層Ⅲ	1c竪穴	1d竪穴	1968第3層	間層Ⅲ/Ⅳ	魚骨層Ⅳ	2竪穴	間層Ⅳ/Ⅴ	魚骨層Ⅴ
頭蓋骨					1fr	② 成1幼1				③ 成	② 成				④ 成3若1		
上顎骨 L							1 若							1 若			
R														1 若			
下顎骨 L						② 成1幼1			1 成		① 成		1 成		① 成		
R						① 成	1 若				1 成				③ 成1若1幼1		
LR?															② 成1幼1		
歯牙							1	1		1	2	1		6(うち1*)	3		
環椎									1 幼								
軸椎																	
その他椎骨									18 幼								
肩甲骨 L																	
R																	
上腕骨 L						1 幼			1fr 幼					2 成1若1	1 成		
R					2fr 成1幼1			1fr						1 幼			
橈骨 L									1 幼								
R					1 成												
尺骨 L	1								1 幼								
R					1 成		1 幼	① 幼, 1 幼									
寛骨 L									3 幼								
R						1 幼			2 幼								
大腿骨 L									1 幼				1 若	2 成1幼1			
R			1 若		1 成				1 幼					1 成	1fr 成		1 幼
LR?			1 若														
脛骨 L														1 成		1 成	
R																	
LR?									1 幼								
腓骨														1*			
中手骨				1													
中足骨																	
陰茎骨									3*	①*, 1*				2*	①*		
その他	中節骨子 基節骨子	指(趾)骨1	掌骨1 基節骨1* 末節骨1, 1*		基節骨3 中節骨1	掌骨1	掌骨1		中節骨1					掌骨8	掌骨3		

網掛け部：体幹部の骨
L：左側，R：右側，fr：破片
○で囲った数字：床面出土資料数
*：製品素材として利用された資料

いくことが不可欠となろう。

以上の検討内容から、オホーツク文化期における人間とヒグマとの関係は、一時的な飼養を伴うⅠ-b段階の可能性を残しつつも、基本的には、複数世代にわたる所有意識がなく、かつ生存状態での拘束を伴わないⅠ-a段階にあるとみなすことができよう。また、香深井1遺跡では、歯の成長線分析に基づいて0〜1歳と査定された幼獣個体8例のうち、5例は骨塚外から出土していることが明らかである（大井他1980）。そのため、仮に、幼獣個体の一時的な飼養を認めたとしても、「飼うこと」と「送ること」が一連の儀礼過程の中で行われた可能性は低い（註7）。したがって、幼獣個体が飼養されていたとすれば、それは儀礼に用いるためではなく、別の理由（例えば、食料資源としての鮮度を保つため、など）を考えなければならない。

（3）住居内のヒグマ集積事例に見る周辺文化との関わり

オホーツク文化期のヒグマが住居内に集積される事例については、大陸に分布する靺鞨文化で飼養されたイノシシ類が住居内に置かれる事例と関連性を持つとする見解（菊池1979、春成1995）がある。この見解は、当該期のヒグマが飼養されていたことを前提としている。そのため、前述したように、オホーツク文化において、体系的なヒグマの飼養、及びそれが組み込まれたヒグマ儀礼が現段階で認定し難い以上、それを前提とするこの論はその時点ですでに成り立ち難いともいえる。さらに、この見解に対しては、春成秀爾氏（1995）の用いた文献資料の年代の捉え方に対する批判（大貫2003）や、両文化の事例が「現象として似た部分があるとしても、その意義を異にしていたのだと考えたほうがよい」（大井1997:91頁）とする提案が出されている。これに加え、本章で明らかにしたように、オホーツク文化期において住居内にヒグマが集積される事例は北海道内のみで見出されているものであり、サハリンではこれまでに調査されたいずれの住居址においてもヒグマの出土例を欠いている。また、第4章で示したように、オホーツク文化期においてイノシシ類が住居内に置かれる事例も稀である。そのため、靺鞨文化でイノシシ類が住居内に置かれる事例とオホーツク文化でヒグマが住居内に集積される事例との間には、大きな空白地域が存在し、春成氏（1995）の描いた「ブタからクマへ」という構図は、その点でも成り立ち難いといえる。さらに、北海道では、縄文時代や続縄文時代からヒグマに対する精神的価値が高いことを考え合わせれば、このようなヒグマに対する特異な取り扱いは北海道の地域的特徴とも捉えることができ、それがオホーツク文化期において独自の発達を遂げたとみなすこともできるのではなかろうか。

かつて大林太良氏（1985）は、民族誌時代に発達を見る「飼いグマ送り」が、家畜飼養を伴うナラ林農耕文化やその縁辺の採集狩猟社会において発生したとする説を提示した。先に示した春成氏らの見解は、この農耕文化との融合による「飼いグマ送り」の発生時期を、オホーツク文化期にまで遡らせたものである。これらの説は、ヒグマの飼養が、飼養体系の確立した社会やそれらとの接触無しには行い得なかったとの前提にのっとっている。

しかし、幼獣を対象とした繁殖を目的としない動物飼養（第2章の表3におけるⅠ－b段階）は、技術的にそれほど難しいものではなく、大貫静夫氏（2003）の指摘するように、イヌの飼養が古くから広がっていた当地域では、比較的容易に行い得たものと思われる。したがって、ナラ林農耕文化との接触の有無に関わらず、親子連れのヒグマが対象となる猟が繰り返されるうちに、「仔グマの生け捕り」や「その一時的な飼養」が徐々に体系化され、最終的に「飼いグマ送り」が出現するに至った可能性も考慮する必要があるのではなかろうか。

また、オホーツク文化のクマ儀礼については、渡辺仁氏（1974）が、アイヌ文化との比較を行い、その類似性から、「アイヌ文化の核心をなすクマ祭の信仰儀礼体系の源流は、あくまでも北方文化に根ざすものであり、最も直接にはオホツク文化の流れを汲むものではないかと考えざるを得ない」（81頁）と指摘している。しかし、類似点として挙げられた、クマをはじめとする獣骨の屋内集積については、サハリンアイヌで、祭りに用いるクマの骨を一時期屋内に置いた後に屋外へ出すのに対して、オホーツク文化では、住居の廃絶時以降も獣骨を屋内に集積させている（註8）。また、サハリンアイヌでは祭りに用いるクマを腹帯で飾るのに対して、オホーツク文化でクマに装束を施したことを類推させる資料は、渡辺氏の挙げた動物意匠遺物1例（図67－50）のみに限られている。以上のように、両文化におけるクマ儀礼の詳細を比較すると、大きな差異が存在していることを認めざるを得ない。したがって、渡辺氏のいう直接的な関連性や系統関係については検討の余地を多く残すが、両文化におけるクマに対する信仰に何らかの関連性があった可能性は十分に考えられよう。ただし、本章で繰り返し述べているように、オホーツク文化でクマに対する精神的価値の高さを示す事例は、北海道に偏在する傾向にある。そのため、総体としてのオホーツク文化の精神観がアイヌ文化と関連するのではなく、縄文時代から認められたクマへの信仰が北海道を主要な舞台として連綿と続き、オホーツク文化の一部や擦文文化、アイヌ文化へと何らかの形で継承された可能性を留意する必要があろう。

註

(1)ポンナイ貝塚は、本輪西駅近くの本輪西郵便局の裏手にあった貝塚で、大正11年に長谷部言人氏や山内清男氏らによって発掘された（関・直良1973）。当時出土した動物遺存体については、直良信夫氏（1939a）が「北海道室蘭本輪西貝塚発掘の獣類」と題して『人類学雑誌』誌上に発表している。動物遺存体の詳細な所属時期は不明だが、『室蘭遺跡』（1962）によれば、長谷部氏らによる調査の下層出土品は縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器であり、上層出土品は続縄文時代前半期の恵山式土器である可能性が高いという。

(2)「骨塚」は竪穴様遺構内部の「祭壇」（北海道立埋蔵文化財センター2003d：41頁）上に設けられた可能性が指摘されている。しかし、調査面積が狭いこともあり、現段階で、この遺構を竪穴とみなす見解には疑問がある。また、「骨塚」資料のうち、浅い穴から出土したヒグマの

前肢やアシカ類の寛骨、肋骨については、骨塚と認定できるほどに、部位の選択性や配置性が高いといえるか疑問であり、これらが竪穴様遺構に伴うかどうかという点についても検討の余地が残る。

(3)ここに挙げた島嶼のうち、弁天島は、根室半島からの直線距離が数百 m 程しかない。そのため、北海道本島から直線距離で 40km 以上も離れた礼文島や 20km 以上も離れた利尻島、奥尻島といった離島とは、北海道本島側との行き来に係る労力の大きさに格段の開きがある。ただし、ヒグマを遺跡に持ち込む際に海を渡る必要があった点では、ともに共通した作業過程を想定することが可能である。また、奥尻島の事例は、青苗砂丘遺跡（北海道立埋蔵文化財センター2002f、2003d）の 1 例のみであるが、これについては、註 2 で示したように、住居内の骨塚資料とみなし得るか検討の余地が残る。

(4)前節で取り上げたように、サハリンの豊栄植民地内遺跡（豊栄 2 遺跡）（新岡 1977〔1932〕、新岡・宇田川 1990）では、竪穴内からヒグマの骨が出土したとされるが、出土部位や出土状況、所属時期などが明確でないため、ここには含めない。

(5)報告書（大場・大井編 1976、1981）に記載された出土量表を基に作成したものである。なお、ここでは、「ヒグマ？」とされた資料や、性別などの一部記載を省略している。製品素材として用いられた遺存体については表に加えた。

(6)環椎以外の椎骨の詳細な部位（頚椎/胸椎/腰椎/仙椎/尾椎）は区別されていない。幼獣の寛骨が最小 3 個体分出土していることから、腰部付近の椎骨を中心としていた可能性もある。なお、肋骨はどの層位でも記載がないため、同定されなかった、もしくはデータ提示されなかったものとみられる。

(7)大井晴男氏ら（1980）は、幼獣個体が飼養された可能性を認めたが、それらが骨塚から出土する事例が稀であったことから、「オホーツク文化におけるヒグマの祭祀は、本来、狩猟の対象としてのヒグマ・野獣としてのヒグマについておこなわれていたのであり、飼育されていた 1 才以下の個体は、すでに半ば祭祀の対象ではなかったのではあるまいか」（63 頁）、と述べている。

(8)これらの獣骨集積が、住居に居住している当時から屋内に存在するのか否かについては、論証する材料を欠く。